
DIEGA

天崎 剣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DIEGA

【Nコード】

N2099C

【作者名】

天崎 剣

【あらすじ】

勇者の末裔、聖遺物インフィニティの正統継承者、デイエガ。しかし彼は、闇の力に支配され、昼と夜、二つの名前を使うことを余儀なくされていた。彼の力の暴走を止めることの出来る唯一の人物である魔女クヒは、いざというとき彼を殺すために一緒に旅を続ける。この、奇妙な二人を巡って、悲しく切ない物語が、ひとつ、またひとつと紡がれていく。100のお題をベースにした短編連作。彼らを待つのは、如何に儂い未来か……【更新停滞中。稀に更新します。お待ちを】

001：言葉の代わりに、君に刃を

黄昏の街に鐘の音が響く。

オレンジ瓦の三角屋根が連なる街、いっぱいすがすがに。

街の中心部にある教会から放たれるその清々すがすがしい音ねは、人々に夕刻を告げる。今日も無事に終わりましたという、感謝を伝える鐘。

街はこの鐘の音を合図に、夜の仕様へと模様替えをする。市場をたたみ、パブの明かりが灯り、夕御飯の支度、仕事を終え、帰宅する人々、そして夜の守りに就く衛士たち。

宿を求める旅人の群れに混じっていた二人が道を外れ、路肩に腰を下ろしたのは、そんなときであった。

「クヒ、今日の宿、早く決めないと。まさか、また野宿だったりする？」

大きくため息をつきながら切り出したのは男のほうだった。

「ええ、誰かさんが賞金首まがいでなければ、きつとステキな宿に泊まれるでしょうけど。持ち金も減ってきたし、昼間のうちに何か大きな獲物でも捕まえて、ギルドへ持っていくことが出来たらよかつたのにね」

横でクヒと呼ばれた女が棘とげのある言葉を吐き捨て、長い銀色の髪を掻き分けながら、男に冷たい視線を向ける。

軽そうなやわらかい青色のローブをまとった彼女は、魔法使いなのだろうか、長めの杖を持っている。杖の先の、球体を持ち上げる鷲の飾りが夕日に当たり、光って見える。

「まあ、ベッドで寝なくても死ぬわけじゃないし。そういえば元々俺、夜行性だったんだよね。最近平和だったから忘れかけてたよ」

男はむっとりしてそのまま黙りこくった。

視界に入るのは、様々な人が忙せわしなく歩く姿。夕日で長く伸びた影が幾度となく彼らの前を通り過ぎる。どこにでもある、平和そうな街。

男は徐に立ち上がり、ぐつと背伸びをする。人垣から頭が出るくらいの大柄で、だがすらつとスタイルの良い、顔立ちのいい男。金髪を前で軽く分け、髪の間からちらちらと両耳のピアスが透けて見える。剣士のような様相はあるが、そのわりに軽装で、担いだ剣だけが仰々しく見える。

「ディエガ、これからどうする？」

クヒも一緒に立ち上がり、スカートの裾についた砂を払った。

「その名前、日の出てるうちはやめてくんないか？ …… って、沈みそうだから、まあ、いいか。せめて明るいうちはその名前で魔物を呼びたくないんでね」

ディエガは渋い顔をして、頭一つ半背の低いクヒを見下ろした。

「ごめん、なかなか頭が切り替わらないのよね。昼と夜で名前を変えるなんて、やめちゃえばいいじゃない。どうせ、あなたの本当の名前なんて誰も知らないんだから。なんていったっけ、昼の名前。」

『ジグ』だったかしら？

「『ジグ・オーデリック』だよ。いい加減、慣れてくれないか。もう何ヶ月も一緒にいるんだからさ」

「あら、ごめんなさい？ 私はその『ジグ』って人と旅をしているっていう自覚がないの！ ホントに、面倒だったらありやしない… …。で、ジグ、どうする？」

ディエガ… …もとい、ジグは手を拱こまねいて、通りの向こう側を人の流れに逆らって歩く一人の少女を目で追っていた。何かに取り付かれたように、フラフラした足取りで、街の外に向かっている。贅沢な服装からして良家のお嬢様のようだ。

「あれ… …。気になるな… …。クヒ、悪いけど、ギルドで探ってきてくれないか… …？ どこかのお姫様の搜索依頼がないか、悪霊退治が必要じゃないか… …」

ペロリッと、悪戯いたずらっぽく舌を出すと、彼はクヒににんまりと合図を送る。

「久々に、面白いことが起きそうだぜ？」

「好きね、相変わらず。私としてはコレ（手のひらを上に向けて親指と人差し指、中指を擦り付ける）になれば構わないわよ？」

「はいはい金ね。金。確かに、どこかの貧乏冒険者に一番必要なのはそれだからな。じゃ、利害一致ってことで」

皮手袋をきつちりはめ直し、両手で髪に癖をつけるように、ぐつと後ろへ掻き揚げる。そして、これから起こるであろう事件を喜んでいるかのように不適に笑う。

彼の赤みがかった瞳が落ちてゆく夕日に照らされ、怪しく光った。

その街は迷路のように入り組んでいて、ちよつと目を離すと、少女を見失いそうになる。デイエガは彼女に気づかれぬように、距離をとって尾行する。

彼女の周りに怪しげな空気が漂っているのを、彼は感じていた。

高価な服を着ているのに、明らかに数日まともに食事、睡眠さえ取っていないのではないかと思われる、やつれた頬ほお。今にも折れてしまいそうで、やもすれば、手を差し伸べたくなりそうだ。

赤みがかった少女の茶髪が、闇夜に映える。たどたどしいシルエツトは、どンドンどンドン、人の波からはずれ、街の城壁の方へと向かう。小路を抜け、更に、北へ、北へと。

（街を出るつもりなのか……？ こんな夜更けに）

いつの間にか、空はすっかり暗くなり、星がちらちらと瞬いている。下弦の月が雲の切れ間からこっそり顔を出す。

少女の歩みは遅い。故に、目的の場所に着くまでに長い時間を要した。多分、大人が歩けばあつという間についてしまつたらうその場所に、彼女は一時間も二時間もかけて……。

人気のない薄暗い場所だった。町の中心にあるものとは似ても似つかないほどの崩れそうな教会があつた。白い壁には蔦つたが這い、所々が黒つぽく汚れ、罅ひびが入っている。すぐそこに城壁が迫っている。草がところどころ伸びかけた、薄汚い墓地。朽ちかけた木の十字架が、その中に整然と並んでいる。明らかに、放置されている。街の

中央の教会には金持ちにしか行けない。そこに移転する前の、まだ小さかった教会の跡地であろうか。神父やシスターが残っていれば、これほどまでに荒れることはなかったろうに。

薦まみれの教会の壁の陰に隠れ、彼女の動向を窺う。

（街の外ではなく、墓地……？　こんな薄気味悪いところで、彼女は何を……？）

墓地と城壁の間に、申し訳程度の林。手入れを忘れられ、茫茫と草が茂る一角に、彼女を待つ、何者かの影が見て取れる。人の形をして入るが、人ではない、何か別のものだ……、と彼は直感した。

「調べてきたわよ」

いつの間にかクヒが後ろに立っている。

「あなたの直感も、捨てたもんじゃないみたいよ」

デイエガの隣の壁に寄りかかり、笑って見せた。

彼は彼女を待っていましたとばかりに、眉を上げ、笑い返す。

「……で、どうだった？　相当の金持ちだったろう？」

「ええ、この街で一番のお金持ち、レギスって商人の、一人娘らしいわ。ここ暫く家に戻らないと、搜索願が出ていたわ。見つけて連れ戻したら、かなり貰えるらしいわよ」

「いいねえ。楽しい展開だ。モンスターの方は？」

「はつきりしたところはわからないけど、彼女の搜索願とほぼ同時に出された、この墓地での幽霊退治の依頼があったわ。……そちらのほうは、あまり報酬は期待できないみたいだったけど。何せ、依頼人がすこぶる貧乏らしいから」

「じゃあ、そっちの方は、金持ちに上乗せして支払ってもらうことにするか。大事な大事な一人娘が亡霊に取り憑かれていたと知ったら、肝が潰れるだろうからな」

少女は、木陰の何者かに向かって、吸い込まれるように歩いていく。冷たい風がどこからともなく吹き込み、彼女の周りに渦巻く。

「……まずいな」

少女を見守っていたデイエガが呟いた。

姿の特定しない、何者かが、見えない触手を伸ばして、彼女から生気を吸い取るうとしてしている。少女はなされるがままに身を委ね、抵抗する気配もない。

「ゴーストだ！ 走れ！！」

ディエガは言うなり、陰から飛び出し、少女の元へと向かっていく。

クヒも慌てて彼の後を追う。

「その女！！ 正気か？！」

彼の紺色の上着が、ヒラリツと風を含み、パタパタと鳴る。少女の側へ駆け寄った彼は、急いで彼女から邪気を払おうとする。粘っこい、重いものが、絡みつき、なかなか離れようとしぬのに、ディエガは苛々し始める。

薄い月明かりに照らされた少女。美しいが、物悲しく、生気を失った顔。何が少女をここへ誘ったのか。こんなことさえなかったら、きっと輝けるほど美しい少女だったろうに。視点は定まらず、確実に幻覚を見ているとわかる。

「クヒ！！ 頼む！！」

「言われなくても……！！」

呪文の詠唱が始まる。杖を振りかざし、気を静める。杖先の鷲が、宙に大きく魔法陣を描き出す。鷲の留まった赤い球から、その魔法陣へ魔力が注がれていく。

魔法陣から少女に、魔法が放たれる。

「デイスベル！！」

ふわっと、空気全体が持ち上がった。

少女は魔法の力を受けて、淡く照らしだされる。

次第に正気を取り戻し、自分の両肩を掴んでいる見ず知らずの男に気づく。

「きゃあ！ あなた、誰？！」

慌ててディエガを自分から引き離そうとする少女。

うまくいったと、ディエガはクヒに合図を送った。少女から手を

離し、両手を肩の高さで開き、無罪を主張する。

「人聞きが悪いな。モンスターに襲われそうになっているか弱い少女を助けてやったのに。……別に、このまま立ち去ってもいいんだぜ？」

「モンスターに？ 私が？」

幻覚から解き放たれたばかりの少女には事態が飲み込めていない。

「アレを見てみな」

指差した方向には、闇の中で蠢く、透き通った何かが。人の形をしている。空ろな目でこちらを狙っている。

少女は戦き、デイエガに寄りかかる。

「な、何？ アレは……?!」

「ゴーストだ。お前はアレに意識を奪われ、自らここへ赴いて、生気を吸い取られていたんだ」

血の気が引く。そして、がたがたと震えだす。

「う……嘘。私、アランに会っていたつもりだったのに、どうして……?!」

「その、アランて奴は、死んだ可能性が高い。そして未練がましくこの世に留まって、お前から生気を奪っていた……と考えるのが妥当だな。この状況では」

死んだ可能性が……と聞いて、少女ははっと何かを思い出した。

そして、辛そうに俯く。

「デイエガ！ 彼女をこちらに！」

クヒが結界を貼り、彼女を連れてくるように促す。足元に広がる大きめの魔法陣に入れば、ゴーストの魔の手から少しではあるが逃れることが出来るのだ。

少女は目をうるうるさせ、どうしたらよいのかと、デイエガに救いの目で訴える。

「これを持って、彼女の元へ行け」

戸惑う少女に、デイエガは腰の皮袋から、小さな包みを取り出して渡す。白い布でくるまれたそれを、少女は両腕でしっかりと抱き

しめ、墓地から少し離れたところで待つ、クヒの元へと駆け出した。
「よし、後は頼むぜ！ クヒー！」

少女が離れたのを確認すると、ディエガは自分の周りをぐるぐると警戒して回るゴーストへ威嚇いかくを始める。林から、墓地の奥へと誘導。気を引いて、少女から遠ざけなければならなかったからだ。

背負っていた細長い剣を鞘さやから抜く。どこから見ても、強そうでない、普通のロングソード。物理攻撃の効かない実体のないアンデッドモンスターであるゴーストに、彼は彼なりの秘策で応戦する。

ゴーストへと駆け寄りながら、横目でクヒの体勢を確認する。お互い、目で合図。クヒの口が、呪文の詠唱へと移る。

「サンダー！」

クヒが、ディエガの剣目掛けて、魔法陣の中から魔法を放つ。剣は魔法を受け取り、金色に輝く。……魔法剣。物理攻撃に魔法の力を加えて、アンデッドにダメージを与えようというのだ。

「いくぜ、化け物！」

襲い来る触手を魔法剣が次々と裂く。ザクツザクツと、見えない触手を切る音があたりにこだまする。すばやい剣捌さばき、すっきりとした身のこなし。順調にゴーストの体力が削られているようだ。

魔法陣に辿り着いた少女は、恐怖からクヒにしがみ付き、激しく鳴る心臓を落ち着けようと胸を擦る。

「あなた、名前は？」

冷たいが、優しさを含むクヒの笑顔に、少女はこくんと頷うなづいて答えた。

「ユナ……です。あなたたちは一体、何者なの？」

「それは、とても難しい質問ね。……敢えてこの場にふさわしい言い方をするとすれば、あなたのお父様の依頼を見てすつとんできた、賞金稼ぎ？ かしらね」

「父が……、依頼……？ 私、ここ暫く記憶がなくて」

「それは、あなたがゴーストに魅了されていたからだわ。あなたには、あの魔物が、誰かに見えただけでしょう？」

「ええ。帝国軍と戦う兵士として戦場に狩り出された恋人の……アランに」

「そう……」

クヒは残念そうに、彼女を見ていた。ユナは、デイエガに『死んだ可能性が高い』と言われたことと、クヒの表情がダブっていることに、シヨックを受けた。

「これを御覧なさい」

そう言っつて、クヒは自分の両手の人差し指と親指を互にくっつけて、輪を作っつて、その中を彼女に覗かせた。

恐る恐る、輪の中を覗く。そのなかには……。

「ア……アラン……！」

デイエガの攻撃にもがき苦しむ、アランの姿があつた。ユナが覚えてる、少し前のアランの、……しかし、弱り果て、辛そうに身体全体をくねらせる、傷だらけのアランの姿が。

「やめて！ これ以上、彼を傷つけないで……！」

ユナは思わず、デイエガに叫んだ。

輪から視線をはずすと、そこには、巨大に膨れ上がったゴーストと、形勢逆転され、苦戦を強いられているデイエガがいた。デイエガの周りには、ゴーストのそれとは違う、更に黒い影が帯び、ゴーストの触手がその影を吸い取るうと、彼の周りを漂っている。

「それは無理だ。こいつ、俺の気を吸い取り始めた……！」

魔法を帯びた剣が幾らゴーストの触手を切り落としても、なかなか弱らなくなつていた。デイエガの意思とは関係なく、彼から出た黒い影は大きく揺らめき、ゴーストの餌になつてしまう。

「また……？ 仕方ないわね……！」

クヒは必戦の魔法……追加のサンダー魔法を放ちながら、ユナの手に抱えられた、包みに目をやる。

「ユナ、デイエガに託された包みを開けなさい」

ユナははつとして、包みを解く。布を持つ手が緊張感で震える。

「ね、……えーっと……」

不安そうにクヒを上目遣いにちらちらと伺う。

「クヒよ」

「ねえ、クヒ。彼の周りのの、あの黒いものは何？ 何故あの人は、あんなに苦しそうに戦っているの？」

「それを教えたなら、あなたの大金持ちのお父様は、私たちに援助してくださる？」

クヒは何か言いたそうなのでも、言えないような、微妙な回答をする。ユナは「さあ、私には、なんとも……」とはぐらかすことが出来なかった。

はらはらと、布が地面に落ちる。そして、包みの中から出てきたのは……。

「筒？」

装飾を施された、銀色の筒。小さな宝石と、細工が見事に調和している。女の手のひらから少しはみ出る長さで、直径がコインひとつより少し大きいくらいの、美しい筒。が、楽器ではない。包みを渡されたときに、少し重いと感じていたが、一体これは何なのだろうと、ユナは手にとっていろいろな方向から筒を眺める。

「それはね、『インフィニティ』と呼ばれる、聖遺物よ」

「聖……って、伝説の？ そんな、私が持つちゃいけないものじゃ……！」

ユナは驚いて筒をクヒに突き返そうとする。

「いいのよ。持ち主の彼はコレに触ることすら出来ないんだから」
くすり、と、クヒが笑ってユナの手を押し返す。

聖遺物、それは、遙か昔、この世界を救ったとされる勇者が残した伝説の遺物。世界のあちこちに散在し、トレジャー・ハンターたちを魅了する、宝物。と、同時に、それ自体に不思議な魔力が宿り、聖なる力で悪を打ち砕くと言われている。

そのひとつが今、ユナの手の中にある。

「いい、ユナ。両手でしっかりと『インフィニティ』を握って。そして、あなたの大好きなアランを救うことだけを考えるのよ」

戸惑いながらも、彼女は言われたとおり、胸の前でインフィニティを両手で縦に持ち、ぎゅっと握り締める。目を瞑り、大切なアランとの日々を思い出す。優しくかったアラン、旅立ちの日に、「きつと戻ってくるから」と優しく微笑んだアラン。考えれば考えるほど切なく、胸が締め付けられる。

（何故、こんなことに？ 戦場でなにがあつたというの？ ……アラン！！）

突然、筒全体が光り始める。その両端から緩やかな光の帯が出現し、上下に伸びる。外側にアーチを描きながら少し伸びたところで折れ曲がり、上下二つの穴から出た光が出会い、弓状の物体を形成する。

「コ、コレは……？！」

たじろぐユナ。

「さあ、手にとつて、構えて！」

クヒは魔法をやめ、杖を足元に置く。彼女の横に添い、無理矢理弓を構えさせると、厳しい声で一喝した。

「弦を引けば、矢が放たれる。あなたはこの弓で、ゴーストを射るのよ」

「で、出来ません……！ そんなこと……！！」

ユナは弓を下ろそうと必死にもがくが、クヒはそれを許さない。女性とは思えない力で、ぐっとユナがインフィニティを握る手を押しさえつける。

「聖遺物は、悪の力だけを切り裂くもの。決して、あなたの愛しい男の魂までは傷付けないわ。……それを放つ、あなたの意思に迷いがなければならぬ」

「私は嫌！ あなたたちが、コレを使って、助けられれば済むことじゃないの？！」

しかし、クヒは譲らない。

「いいこと？ 私にはあなたの彼を助ける気などないのだから、あなたがやらないのなら、魔法で消滅させてあげてもいいのよ？」

なければ、彼……デイエガが本気を出して、あなたの彼を木っ端微塵に砕いてしまうことも出来るのよ？」

「そ、そんな……」

「アレだけ膨れ上がったら、もう、意思などない、ただの化け物だわ。あなたが例え、たくさんの愛を言葉にしても、彼には届かない言葉の代わりに、刃を向けることも、時には必要なのよ」

クヒの言葉に、ユナは全身を激しく打たれた。なんて、なんて強い……。

「あなたが、私の立場だったら？ あの人を射ることが出来る？」

徐々に弦を引くユナ。大粒の涙を浮かべて、必死に勇気を振り絞っている。

「もちろん。何を迷うことがあるの？ 私はそもそも、彼を殺すために、一緒に旅をしているのだから」

「殺す……？」

「あの、黒い影は、彼の中に巣食う、悪魔。その悪魔が目覚まし、彼を完全に支配し、彼が彼でなくなってしまったときに、私はこの『インフィニティ』で、彼を殺すのよ」

クヒの視線の先には、墓地を駆け回り、必死にゴーストと戦う、デイエガの姿があった。尚も放出を続ける彼の黒い影が、明らかにゴーストを引き付けていた。ゆらり、ゆらり、どんどん膨れ上がり、その高さは城壁を越え、教会の屋根を越え……。デイエガはその顔を見上げ、「吸い過ぎだ」とぼやく。しかし、剣が帯びていた魔法も、そろそろ切れそうだった。

と、彼女の視線に気づく。

身を屈め、ゴーストを送る。

「弦を……！」

デイエガの言葉に促され、ユナは思い切って弦を引いた。光の矢が現れ、まばゆい光を立ち上らせる。クヒが、彼女の震える手をつかりと押さえ、目標に矢を向ける。

そして。

右手がゆっくりと弦から離れる。

矢は迷うことなく、ゴーストへ突き進む。草丈のある荒れ放題の墓地に風を吹かせ、膨れ上がったゴーストの中心部へと向かってゆく。

ユナは、しつかりとその様子を見つめていた。

『聖遺物は、悪の力だけを切り裂くもの。』

決して、あなたの愛しい男の魂までは傷付けないわ』

クヒの、その言葉を信じるしかない。辛い、苦しい、胸が張り裂けそう……！

ゴーストを射る重々しい音が、夜の静寂を裂く。

膨れ上がったゴーストの身体のだ真ん中に、大きく穴が開く。

矢は、穴の中心部に留まり、金色の光の粒になって粉々に砕け散る。そしてその粒の一つ一つが輝きだし、ゴーストの身体はひび割れたガラス玉のように粉々に崩れ落ちてゆく。淡い光がその全体を包み、優しく、輝いている……。

崩れていくゴーストの中に、捉えられていた魂が、浄化され、姿を現す。武具を纏った、兵士。

「アラン……！！」

ユナはインフィニティから手を離し、その兵士の亡霊へと駆け寄る。

彼女の手から離れたそれは、光が消え、ただの筒へと戻っていた。クヒはその筒と、自分の杖を拾い上げ、彼女に続く。

「会いたかった……！ どうしてこんなことに……」

ユナはアランに両手を差し伸べたが、実体の無い彼には触れることすら出来ない。改めて、彼が既に死んでいることを思い知らされる。『すまない、ユナ……』

今にも泣きそうな顔でユナを見つめるアラン。彼もまた、手を差し伸べ、透き通った手で、彼女の頭を撫ぜる。

感動的な再会に、邪魔をしないように距離をとって、二人を見守るクヒに、デイエガがゆっくりと近づいてくる。ほっとしたように、

二人は顔を見合わせ、頷く。

「ま。無事に終わったみたいだし。よしとするか」

「よしとするかじゃないわよ。自分の力を押さえようとしないと、もっと酷い目に遭うわよ」

「ご忠告、ありがとう。……なんかなるなら、やってるさ」

クヒの言葉にふて腐れる。クヒはいつも、デイエガにはストレートに喋るのだ。(もう少し、気の利く女なら)と、口に出しそうになつて、やめる。

「ユナ、君にどうしても伝えたいことが……。そう、あなたたちもアランはそう言つて、デイエガとクヒのほうに視線を向けた。」

「さつきはありがとう。お陰でこうして、ユナとまた話すことが出来た。感謝しています」

呪縛から放たれたアランは、清らかな顔をしていた。

「実は、僕は帝国軍との戦いで、とんでもないことを知ってしまったのです。それを、どうしてもユナや、ユナのお父さん、そして、それを知らないたくさんの人に伝えたくて、死んでも死に切れなかつたのです」

「それは、俺たちが聞いてもいいことなのか？」

デイエガが訊く。

「はい。……むしろ、それはあなた方とも深いかわりのあることなのかも知れません」

「と、言うこと？」もったいぶるアランに、デイエガが催促する。

「帝国が闇の力を手に入れ、この世界を征服しようとしていることは、皆さんも知つてのとおりです。僕たちは、帝国に近い、北の地まで赴き、帝国軍と戦火を交えました。そして、そこで見たのは……」

アランは言葉を詰まらせた。そして、恐怖で肩を震わせる。

ユナは「どうしたの？」と、アランを見上げる。

「死なない兵隊」

アランの言葉に、みな息を呑む。

「つまり、アンデッド・モンスターの群れだったと……？」
ディエガもクヒも、そしてユナも、心底震え上がった。アランは言葉を続けた。

『そうです。大量のアンデッドが、行く手を阻むのです。そして、僕も、気がつくと、ゴーストとなつて、この地に来ていました。ユナと会いたい一心で、しかし結果として、彼女を魅了し、生気を吸い取ってしまったのです』

アランはゆっくりと、三人の顔を眺めた。

『帝国を支配しているのは、もしかしたら人間の王ではないかもしれませんが。やがて、あの不死の軍勢は遠く離れたこの地までもやってくるに違いありません。僕はその警告を、死んでいった仲間たちの変わりに、みんなに伝えなければと……』

あなた方のような、聖遺物を持つほどの人物は、特に狙われかねません。これから起きるであろう、恐怖に対抗できるだけの力を持っているならば、力ない民を守ってほしいのです。

お願いです。富や権力のある人たちに呼びかけてください。帝国の魔の手から世界を守るためにも』

そして、目を閉じた。

役目を果たした亡霊は、天へ昇る柔らかな光に包まれた。

「アラン……！！」

名残惜しそうに、手を差し伸べるユナ。

アランの身体は、砕けるように、足元から徐々に消えていく。

『ユナ、最後に君に会えてよかった』

彼の声は、いつまでも少女の耳から離れなかった。

ユナは崩れるようにわっと泣き出した。

闇夜にかかる下弦の月は、古ぼけた蔦まみれの教会の屋根の上から、可哀想な恋人たちを、静かに見守っていた。

002：痛みを伴う

そこは三方を山に囲まれた、大きな港町。

港から真つ直ぐ南北に伸びた道の両側に、様々な色のテントが軒を連ねる。活気と品物に溢れ、暑い日差しに負けない、逞しい商人たちの威勢のよい掛け声。空を飛び交うウミネコの優しい声が、街全体を包み込む。買い物客もどこか嬉しそうにその街の空気を満喫する。

外敵から身を守るに最適と言われる地形からか、攻め入られることは殆どない。だからこそ、その街は栄え、人や物資が自然に集まってくる。

漁師も職人も、この町では豊かに幸せに暮らしている。

それは、この街「ノアル」の権力者である、「レギス」という豪商の力の賜物でもあるのだ。

レギスの屋敷は町のはずれ、小高い丘の上にあった。広大な敷地はぐるつと高い塀で囲まれ、門扉には威しい装備をした衛士が二人いかにも金持ちの豪邸、宮殿のような門構えに、金を注ぎ込んだ庭園。日の出ている間は庭師が庭中の手入れをしているのがいつも見える。

「さて、娘を助けてくれたことは感謝しよう。……それで？ お前たちは何が望みなのだね？」

ギルドから二件の依頼分の報酬……レギスの娘の搜索依頼と亡霊退治……を受け取ったデイエガとクヒは、レギスの元を訪ねていた。レギスは一階の応接間で、大きくゆつたりとしたソファーにどしんと腰をかけ、ひじかけに置いた右手の中に胡桃を転がしながら、二人の旅人を見つめている。金髪の背の高い身軽な剣士は冷たい視線でレギスを見下し、彼の左に立つ魔法使いの女は、そんな彼の態度を正そうと、肘で小突いている。世界に名を轟かす大商人であるレギスに面通っているとは思えない、緊張感のなさ。レギスにとつ

てはただの不審者でしかない。

体格のいいレギスは貴族まがいの豪華な衣装を身に纏い、たぶたぶとした顎の上と口に白髪交じりの髭を生やしていた。頭はすっかり後退し、最早後頭部にしか毛が生えていない有様だが、それでも貫禄を見せているのは、彼の年の割りにぎらぎらと輝く瞳の所為かもしれない。

応接間に飾られた何枚もの絵画、彫刻、そして武具は、彼が金持ちであることの象徴でもある。応接間の扉は閉じられていたが、その向こう側にはレギスに何かあったときのために、と、やはり衛士が一人、身構えて警戒している。

「で？ どうなのだ？ 正直に答えたまえ」

レギスはソファアの前に立つ二人をじろじろと見つめた。

「我々の旅の資金援助を願えないかと」

デイエガは躊躇いもなく、大商人に進言する。

レギスはふつと鼻で笑い、もう一度、じろじろと二人の顔を眺めた。

「滑稽な。何故私が娘の恩とはいえ、お前たちのような素性もわからぬ者に金を出さなければならぬのか。よくもずけずけと言えたものだ」

デイエガはレギスの言葉にむつとして、一步前が出る。それをクヒが牽制する。

「レギス様、連れが大変無礼を」

クヒはしとやかに礼をし、詫びる。が、デイエガはそれが気に食わず、横目で彼女に怒りを見せる。

「勿論、すんなり承諾していただけとは思っておりません。ですが、この先、この街にも帝国軍が現れる可能性があるとお聞きになったら、考えが変わるかもしれませんわね」

「ほう、帝国軍……。穏やかではないな」

レギスは身を乗り出して、クヒの話に聞き入る。

クヒは待つてましたとばかりに話を続ける。

「帝国軍は大量のアンデッドを以って世界を混沌の渦へと導こうと
しているらしいのです。もしそんなものがこの街へやってきたら？
どうなります？」

「……間違いなく、全滅してしまうだろうな」

レギスは表情を曇らせた。

「私たちに援助頂ければ、それを阻止してご覧に入れますわ。あら
ゆる災いは私と彼とで排除いたしましょう」

「それはそれは、ずいぶん自信だな」

ありえない、ハツタリだ、と、レギスは決め付けていた。今まで
だって、似たような理由で金をせびりに来る冒険者がいなかったわ
けではないからだ。

「その根拠は何だ？ 何か指し示すものでもあるのか？」

眉をくいと上げて、小馬鹿にする。

(まあ、それが当たり前の反応だな)

ディエガは白け切った目でレギスを見下す。

クヒはレギスの嘲笑をもともせず、彼の興味を引こうと、こう、
続ける。

「レギス様は、『聖遺物』というものをご存知でらっしゃいますか
？」

「もちろん。実際目にした事はないが、古の勇者、賢者の残した賜
物だ、わしとお目にかかれるものならお目にかかりたいと思っ
てる。手に入れることが出来るならば、そうしたいともな」

「その、聖遺物のひとつを、彼が持っているのです」

「ほう……！ それはそれは……。なかなか興味深い」

レギスは一度引いた身体を、また前のめりにして、クヒの言葉に
引き込まれていく。それを、彼女の妖艶な美しさが手助けする。銀
髪に、深い青色の瞳。透き通るような白い肌。青地のローブに身を
包み、奥ゆかしく、そして、顔に似合わぬ低めの美しい声。どれを
とつても、街の娼婦どもより幾分も美しい。

いやらしい目つきでなめるようにクヒを見るレギスに、ディエガ

は素でキレそうになる。金の心配さえしなくてよければ、こんな男に頭を下げることなどないのに、全く不快だ。

と、クヒが横目でちらちらと右隣のデイエガを見ている。彼女は右手をさり気なく（などないのだが）差し伸べて、何かを欲しているようだ。デイエガは渋々と、腰の皮袋から白い包みを取り出した。「もしよろしければ、一度お触りになられては？」

デイエガから受け取った包みを、彼女は仰々しく両手でレギスの面前へと差し出す。パツと、レギスは表情を変え、握っていた胡桃をポケットに押し込むと、興味津々とそれを覗き込んだ。そして、胸の高さでそつと大事そうに渡されたその包みを、レギスは興奮しながら解いていく。

「おお……、なんと美しい……！」

白い包みから出てきた銀色の筒を取り、くるくると様々な角度で見回す。両手にすっぽり収まる、笛のような、しかし、音を奏するには少し重い筒。見事なまでの装飾が、煌びやかな宝石が、レギスの心をくすぐる。

「『インフィニティ』と呼ばれる聖遺物です。見た目はただの筒ですが、様々な武器へと変化します。剣が必要なときは剣に、弓が必要であれば弓に、ハンマーにも、斧にでも、なんにでも姿を変えま

す」
クヒの説明に、何度も頷く。懐から出した虫眼鏡で、鑑定でもするかのように、装飾の一つ一つをまじまじと観察しだす。

「なるほど。確かに安物ではなさそうだ。しかし、コレが本物の聖遺物である証拠は？ 偽物を突きつけて、わしから大金を巻き上げようとしているのではあるまいな？」

疑り深いレギスは、ニヤニヤと笑いながら、尚も筒の中を覗いている。

「滅相もございませんわ。それならばレギス様、両手でその筒をしつかりと握ってくださいませ。そして、魔物を倒すビジョンを思い浮かべていただけますか？ 面白いものがご覧になれましてよ

「？」

「ふむ」

疑心暗鬼ながらも、レギスは彼女の言葉通りにがっちり両手で垂直に筒を握り締めた。

不思議と、彼はクヒの言葉には従ってしまおうようだ……。まるで彼女の言葉、声、そのものに魔力が宿っているように。

暫く握っていると、ぼうっと筒全体が光りだす。その光は筒の上部に集まると、天井目掛けて真っ直ぐと伸び、蝶の羽を広げたような鏢つばと共に、大きな十字架を作り出す。見事な両手剣。

「おおお！ 何ということだ！ これこそ正に聖遺物……！」

レギスは子供のように感動し、光で出来た剣をきらきら輝いた瞳で見続ける。

「こんなものを何故お前たちのような冒険者が持っているのだ？ いくらだ？ 幾ら積めば私のものになるのかな？」

喉から手が出るほど欲しくて堪らなくなったレギスは、値段交渉を始めようとする。先程までとは目付きが違う。欲しいものは全て手に入れてきた男の独占欲こぞが疼く。

「残念ながら」

クヒはにつこり笑いかけ、レギスの手から光の剣をひよいと抜き取った。

「お譲りすることは出来ませんわ」

瞬間、光は消え、元の「インフィニティ」の姿に戻っていた。

おもちゃを失ったレギスは寂しそうに、宝を失った手と、クヒの手の中のそれを交互に見つめている。

「『聖遺物』は、正当な持ち主……。ダイエガの意思によってしか力を発動させません。あなたの元にこれが渡っても、いざと言うときは何の役にも立たませんわよ」

余裕の笑みを浮かべる二人に、レギスはむすつと顔を顰しかめた。

「『聖遺物』を持つ、ということは、それ相応の価値がある人間とということなのか？」

レギスは依然として納得できない様子。チラツと、大商人の視線がデイエガに移る。デイエガは不敵にレギスを見つめ返す。

「面白いものを見せてやるうか」

彼は、はめていた右手の皮手袋を外し、皮袋にしまうと、クヒの手から筒を奪い取った。

「デイエガ、何もここで……！」

インフィニティを掴んだ途端、デイエガから大量の黒い気が噴き出す。筒を握り締めた右の掌からは、何かが急激に溶け出すような黒い闇が……！

あまりの勢いに、クヒもドアの付近まで吹き飛ばされる。

部屋が、屋敷全体ががたがたと震えだす。壁にかかった絵画は床に落ち、彫刻や武具たちも、突如現れた闇に怯え、騒ぎ出す。

「や、やめろ！ 何をする?!」

立ち上がり、あたふたと装飾品たちをなだめようとするレギス。

その姿があまりに滑稽で、面白くなったデイエガは大声で笑いながら、剣へと姿を変えたインフィニティの刃先をレギスへと向ける。禍々しい黒い刃。魔物が取り付いたように、ガシャガシャと牙を鳴らす、生きた剣。聖遺物が創造したとは思えない、恐ろしさ。レギスの頭に喰らい付こうと、大きな目玉を見開いて唸^{うな}っている。

「はははははは！ どうだ？ さすがの大商人も、腰を抜かしたか？」

レギスは恐怖のあまり、全身の毛穴からどつと汗を噴き出していた。全身から力が抜け、へたり込む。

「な、何故だ……？ なぜ、『聖遺物』が、こんな姿に……？ 闇の力を持つ者は、聖遺物に触れないはずではないのか……?!」

ガチャガチャと、扉のカギを開けようとする音。レギスの異常に気付き、廊下にいた衛士が慌てて鍵穴を探っている。しかし、どうしても開かない。クヒが魔法で更に鍵をかけているのだ。

「ごめんなさい、今は邪魔されたくないのよ……」

衛士には聞こえないが、クヒは申し訳なさそうに、ドアの方向に

眩く。

「俺は確かに、『闇の力を持つ者』だ。だが、彼女の言うように、『インフィニティの正統な継承者』でもある。コレが何を意味しているのか、わかるか？」

「インフィニティは刃を向けたまま、レギスに質問を浴びせる。『わしをからかっているのか……？』」

「レギスも負けじ、と、ゆっくり立ち上がり、鋭い眼光でディエガに睨みをきかせる。」

「からかう……？ とんでもない。世界随一の大金持ちのレギス様が、俺たちに理解を示してくれるかどうかの瀬戸際だ。冗談でこんなことをするはずないだろう？」

「いたずらっぽく話してはいるが、ディエガの全身には苦痛が走っていた。金髪の間隙から、うっすらと汗が滴り、顎を伝う。身体から噴き出る闇に体力を奪われ、更にインフィニティを握った右手は、人間の姿を失っていた。肌は紫がかって黒光りし、まるで大きな甲虫の装甲を思わせる。ガントレットをはめたような、ごっごつした腕。」

レギスはその腕に気付き、身の毛がよだった。

「一体、お前たちは何者なのだ……？」

「その昔」

「ディエガは徐にレギスから剣先を逸らし、だらんと床に向けた。」

「世界を救った勇者とやらは、再び世界が闇に吞まれそうになったときのために、力を封印し、子孫に委ねた。今から二十数年前、力は放たれ、一人の男が力を継ぐ者として、生を受けた。しかしインフィニティを握った手から、シュウシュウと何かが溶ける音がしている。」

「ディエガは苦しそうに、大きく肩で息をした。」

「その男は、闇の者へと姿を変えられてしまった」

「な、なんだと……！ それがお前だというのか?!」

「……いかにも」

クヒの差し出した白い布を受け取り、左手に当て、そこにインフイニティを持ちかえる。魔剣は姿を消し、デイエガはいつもの筒に戻ったそれを、布ごとクヒへ渡す。

「だから、俺はインフイニティを所持しているが、今みたいに、まともに触ることが出来ない。触っても、あの通り。力をコントロールできなくなつて、裏の姿が現れてしまう」

インフイニティによって姿を変えられていた右腕は、その効果範囲から抜けたためか、徐々に元の「人間の腕」へと戻っていく。

「俺たちは、この呪いを解くために、帝国へと向かっている」

「……帝国に、何か関係が？」

デイエガは首を横に振った。

「わからない。この呪いをかけた人物が、帝国の王の使者であるらしいこと以外、何も。悔しいが、他に何も知らないんだ……」

彼の赤い瞳は寂しそうに潤んでいた。「呪い」の話になると、それまでの勢いがふっと、消え去ってしまった。

辛そうなデイエガに、クヒが寄り添う。彼女もまた、彼と同じ気持ちなのだろう、ぐっと、込み上げる感情に耐えている。ぎゅっと、彼の手を握り締める。

二人の様子を横目で見ながら、レギスはなにやら思案した。そして、自分の洋服の埃を払うと、髪の毛のない頭を擦りながら、ゆっくりと室内を回った。

「……なるほど。納得した。お前たちが帝国からの敵を打ち倒すという理由も、金が欲しい理由も。お前たちは、今までであった、どの冒険者とも違う。間違いなく、わしが探していた、本物だ」

レギスはやっと、ソファに辿り着くと、自分の定位置へとどっしり腰を据えた。

「わしが思うに、お前たちの旅路は、決して甘いものではない。痛みを伴うものだ。それが、どういうことだが、わかっているのだからうな？」

「勿論」

そう答えた、デイエガの目には、一点の曇りもなかった。

「痛みを伴っても尚、掴み取りたいものがある。あなたがそれを知っている人間だと思っただからこそ、あなたに援助を頼んだんだ」
パン、パンパン……。

レギスは彼らに無意識に拍手を送っていた。

彼の心は、穏やかだった。久しぶりに、興味深い連中と会えたこと、自分が、その役に立てること。こんなことは、滅多にあるものではない。彼らが、自分の娘を助けた偶然に感謝する。そうでなければ、決して出会うことなどなかったかもしれないのだから。

この後、彼らがレギスの援助を受け続けたことは言うまでもない。レギスもまた、彼らのお陰で、「ノアル」の街を人知れず帝国の魔の手から守ることが出来た、ということも……。

003：傷つけて、傷ついて

朝日が昇り、市が活気付く。

港市場は今朝水揚げされた魚介類、遠くの町から運ばれた野菜や果物、香辛料、それに、旅人のための仕入れたばかりの防具や武器道具などを並べたテントがぎっしりとひしめき合う。まだ薄い水色の空の下で、その場所だけは朝一番だというのに最高の熱気で、覚めきらない目も一瞬で覚めてしまう。

人という、人。街の、いや、国中の人間が集まったのではないかと思うほどの人の群れ。朝市、夕市は特に多い。朝には新鮮なものを、夕方には掘り出し物を、それぞれ安価で得ることが出来るからだ。

家族ぐるみで店を開く者が多いこの地方、テントの隅では赤子をあやしながら金勘定をする母親の姿、慣れない手つきで商品の受け渡しをする小さな子供の姿も多く見られる。それは、この街が生きていることを端的に表現しているようでもあり、多くの旅人が長旅の疲れを癒される光景でもあるのだ。

ディエガとクヒは、この、ノアルの街に暫く滞在していたが、そろそろ旅立つ準備をと、市を訪れた。金髪の背の高い凜々しい剣士と、銀髪の艶かしい魔法使いの女は、そこにいるのが不似合いなほど、妖しく場違いな空気を保っていた。しかし、彼らはそれに気付くことなくあちこちのテントに寄っては、品定めをする。

店主らは彼らの風貌から、金の臭いを嗅ぎ付け、高値で物を売ろうと躍起になるが、実はその財布はとても厳しいため、簡単に二人は首を縦に振らない。本当に必要なものだけを、必要な分だけ手に入れなければ、せつかく手に入れた資産も、あっという間に費やしてしまうのが、目に見えるからだ。

長旅に必要な保存食、それから薬草、治療薬。新しい剣、それに、もう少し丈夫な防具が要る。二人は市場中を歩き回り、漸く必要な

ものを全て買い揃えた。

「……こんなところで、どうだ？ ノアル程の街はそうないだろうから、必要なものを買っなら今のうちだぞ？」

市場を抜け、広い道端に立ち止まって、二人は持ち物を確認しあった。

「ええ、多分、買える物は全て……、あら？」

クヒはそこまで言っつて、ちらりとデイエガの腰袋に目をやった。パツクリと裂け、袋の中身が覗のぞいている。

「あなた、いつの間にやられたのね」

クヒが指差したその袋の中から、命の次に大切なものがなくなっていることに気付くのに、それほど時間は掛からなかった。

「イ……インフィニティが、無い！」

一気に血の気が引いた。

その腰袋には、「インフィニティ」と呼ばれる、聖遺物が入っていたのだ。この先、旅を続けるには欠かせない、大切なもの。白い布に包まれた、美しい銀の筒。自分たちが、正統な「勇者の末裔」であることを示すための、唯一の代物が、消えてしまったのだ。

デイエガは動揺し、いつものクールさを失ってしまった。路上であちこち荷物を引つ掻き回すが、出てくるはずなど無い。

「な、何てことだ！ なんて失態だ！」

「触れもしないくせに、自分が持つてるって、言うからよ」

クヒは慌てふためくデイエガを一笑した。

「……言われなくても、わかってるよ！ 自分のだらしなさをコレほど呪ったのは、初めてだ……」

デイエガは民家の壁に背をもたれて、がっくりと頭を抱え込んだ。ポン、と、クヒは肩を叩き、にっこりとして市場を指差した。

「戻りましょう。まだ犯人は中にいるかも。アレの価値がわからない人間のしそうなこと、大体わかるでしょう？ 店という店に聞き込むのよ？ いい？」

荷物を纏まとめると、クヒは涙目のデイエガを無理矢理引つ張り、市

場へと戻っていった。

「銀色の筒を売りに来た者はいませんでしたか？」

二人は手分けして店を回った。決して少ないとはいえない店舗数。もし、この市場から出て、港から外に出られてしまえば、それこそ大変なことになる。急がなければならない。しかし、簡単に見つかるものでもないようだ。

「あれ、お客さんも、やられたんだねえ！」

とある防具屋の主人が、デイエガの腰袋を見てそう言った。

「『も』？　ここでは、よくあることなのか？」

デイエガは店主の言葉に耳を傾けた。

「そうさ！　最近……ここ、数ヶ月だけだな。ナイフで袋を切り裂いて、中から金品を掻さつ攫さらう『スリ』がいてね。犯人には、高価なもの隠し場所が大体わかるらしくてさあ。お客さんで何人目かなあ。金ならば足は付かないが、お客さんのように特定の物なら、案外見付かるんじゃないの？」

人のいい主人は、ニヤニヤと笑いながらだが、きちんと答えてくれた。それだけで、少し救われた気がする。

「なるほどね。サンキュ。もう少しあたってみる」

「幸運祈ってるぜ」と手を振る店主に見送られ、デイエガは更に市場の奥へと入っていった。

両手に抱えたはずしりとした白い包み。

路地の奥で、その包みを解く、幼い手。

中から現れた銀色の、美しい装飾の施された筒を眺め、穴から向こう側を覗き見る、まん丸な目。

「なんだ……、これ？」

ふつと息を吹き込んでも、音も出ない。どうやら楽器でもないようだ。

「何でこんなもの、大切に持ってんだ？」

得体の知れない銀の筒を手にしたのは……、子供だった。

十歳そこそこの、薄汚い格好の少年。頭に深々と被った、少し大きめの栗型帽子が彼の顔を体よく隠している。

そこはどうやら、彼の住処らしく、汚いながらも穴の開いたボロ切れで雨よけがしてあったり、木箱で寝床らしいものが作ってあったりする。食べ物を食い散らかした跡に、ネズミが数匹群がっていて、全く清潔感が無い。

通路自体は、大人が一人、やっと通れるくらいの幅だが、小柄な少年にはそれくらいが丁度いいらしい。

「こんなわけのわからないものじゃなくて、現金とか、金目のものだったらよかつたのになあ……」

少年はしょんぼりとして、路地の間から空を仰ぎ見た。

抜けるような青空が、建物の壁で切り取られ、白い雲が時折、その間を通り抜けていく。稀に迷い込む、小さな鳥たち。自由に飛び回り、いつしか自分の側から去っていく。

「せつかくだもの、少しでもお金になるなら……」

少年は筒に元々巻かれていた白い布を巻き直し、市場へ急いだ。

港市場全体が明るく霧困気に包まれていたが、その店の軒下だけは、なぜか物悲しい霧困気が漂っている。

道具屋「風と月」、主人のジャックは商売する気がないのだろうか、店の奥に引込み、沈んだ表情で壁に掛けられた数着の小さな洋服を見つめていた。ジャックも、その妻も、泣きすぎたのか目を腫らしている。身に着けた暗い色の服が客を寄せ付けようとしていない。店の奥から時折おんおんと泣く声が聞こえるため、隣近所の店の者たちも、はつきり言って、迷惑していた。……しかし、誰も彼らに静かにして欲しいなどと言うことは出来なかった。

ジャックの一人息子が死んだのは、今年の初めだった。寒く、乾いた風の日、息子のダンは風邪をこじらせ、そのまま息を引き取ってしまった。なかなか子供が出来ず、結婚十年目にして漸く産まれ

た小さな命は、十歳の誕生日を目前に、消えてしまったのだ。

「おじさん、おはよう！」

気落ちしたジャックに、小さな少年が語りかける。

ぼろぼろの服、大きな帽子。孤児みなしこのロビンだ。

「おお、ロビン。今日はどうしたね？」

ジャックは重たい腰を上げ、カウンターからちよこんと顔を出したロビンへと歩み寄った。

「あのさ、薬草とか薬なら、大体の価値がわかるんだけど、街で拾った、コレ。全然、何だかわかんないの。何だと思う？」

ロビンは背伸びし、カウンターの上に白い包みを差し出す。

ジャックは恐る恐る、その包みを解き始めた……。

「筒だ」

美しい装飾を施された、銀色の筒。散りばめられた宝石だけ見ても、決して安いものではないと想像が付く。

「ロビン……、コレは本当に、『拾った』ものなのかい？ こんな高価なもの、落とすなんてとても考えられない……」

ジャックの問いに、ロビンはビクツと肩を揺らし、一歩下がった。

「今までお前が何を売りに来ても、私は何も言わなかったが、これは……」

品定めをしながら、ジャックは今まで心に秘めていた疑惑を口に出そうとしていた。

偶たまに話しかけてくる、このみすぼらしい少年を彼は不憫みひんに思っていた。自分の死んだ息子の代わりだと思って、危険なことをしていると察していながらも見逃していた。しかし、これほど高価なものを持ち込まれては、擁護ようごしきれないと思ったのだ。

「ロビン、お前は、やはり……」

自分を疑うジャックの目に、ロビンは慌てて包みをぶん取った。

布からはみ出した銀の筒が、小さな手の中で震えている。

「ご……ごめん！ おじさん……。僕のこと忘れて……！」

ガタガタと歯が鳴る。

振り向き、走り去ろうとした、その時。

ロビンは急に現れた、大きな影に行く手を遮さへきられた。

「忘れて欲しい？ それは出来ないな」

背の高い、金髪の、若い剣士の男だ。パツクリと切り裂かれた腰の布袋には、見覚えがある。

「子供か。どおりで腰の辺りばかりが狙われるわけだ。 さあ。返してもらおうぞ」

剣士の鋭い目がロビンを責め立てる。

白い布と筒がするりとロビンの手を抜け、剣士の元へと戻っていく。状態を確認し、ほっとする。丁寧に筒を布で包み直し、別に用意していた道具袋へと片付ける。

「隠し持っていたナイフ……、そこか？」

剣士は右手をにゅっと少年の背後へ回し、ズボンの後ろのポケットから折りたたまれたナイフを取り出した。

ロビンははっとし、両手を伸ばして取り返そうとしたが、相手が悪かった。身長差がありすぎて、幾ら背伸びをしたところで全く届かない。

剣士は手にしたナイフを高いところでもてあそびながら、ロビンを冷たい目で見下ろしている。

「か……、返してよ！ それは、大事なものなんだから！」

「大事？ スリをするのに必要ってことか？」

ロビンの顔が急に赤らんだ。凶星だった。

カウンター越しにやり取りを見ていたジャックは、突然現れた男が躊躇せず本題に入ったことに驚きを隠せないでいた。

「カバンや布袋を狙った切り裂きスリが横行しているって、町中の話題みたいだな。お前はこのナイフで切り裂くたびに、自分の心も傷付いていることに、気付かなかったのか？ 何故続けた？」

左手でロビンの胸倉を掴み、額を擦り付けて脅し始める剣士。

ジャックは恐れていた事態に動揺し、止めることすら出来ない。

……と、剣士の目に、店の奥で怯える、黒っぽい服の女の姿が映

った。そして、店の中にかけてある、小さな洋服たち。品揃えは悪くないが、客の寄り付かない店……。

「 そうだ 」

剣士はにやりと意味深に含み笑いだした。

「 お前をギルドに差し出して、とも思ってたが、案外金にはならんかもな。子供だし、見逃してやれという奴もいるだろう。港に船が着いたら、よその国へ売り飛ばす、という方法がある。子供というのは裏では高く売れるんだ 」

ロビンは顔面蒼白になり、首を必死に左右に振って、胸を掴む力強い手を離そうと必死にもがいた。いやだいやだと泣き喚く^{わめ}。

やがて道端の視線が普段は静かなその店の軒先へと注がれ、観衆が輪になって騒ぎ出す。

「 や……、やめてください！ 」

ジャックがカウンターの下から表へと出てきた。

顔中を汗でいっぱいにし、真っ赤になって、それでも勇気を出して。彼は剣士からロビンを奪い取って抱きしめた。

「 うちの……、うちの子です！ ロビンはうちの子です！ 息子が大変なご迷惑を……！ 何としてでも償いますから、それだけはお勘弁ください……！ 」

頭を下げるジャック。

状況が掴めず、目を泳がせるロビン。

ジャックは無理矢理ロビンの頭を掴み、剣士へと頭を下げさせた。その様子に剣士はにやりと笑い、屈めていた腰を起こす。

「 そういうことなら。このナイフを戴く。二度とこんなことをしないようにな。それから、この店の品をほんの少し、安く買わせてもらうって事で、どうだ？ 」

彼が出した打開策に、ジャックは思わず顔を綻^{はら}ばせた。

「 それくらいでよいなら……、喜んで！ 」

道具屋「風と月」の商品を一割引で手に入れたダイエガを遠目で

見ていたクヒは、腰に手を当てて大きく溜め息をついていた。

「それって、値引き？ 殆ど原価じゃない」

割引率が気に食わなかったらしい。

「まあまあまあ。安いことは安いんだから、気にするなよ」

市場を離れ、町を出るために北の門へと続く道を歩きながら、クヒはデイエガに尋ねた。

「あなたにしては、まともな判断ね。どうして店主が子供を庇うと思っただの？」

「ああ、それはね」

デイエガはにやつと口の端を上げ、目を細めた。

「あの店、子供がいないのに、子供の洋服がたくさんあったんだ。

そして、黒っぽい服に、冴えない顔。不幸があつたに違いないと思つてね」

「へえ。よく見ていたわね。私はあなたが、そのまま子供を売り飛ばすのかと思つて見てたけど。それなりに考えて行動していたみたいで安心したわ」

「……失礼だな」

「ねえ、それって、昼間だったからって、関係ある？ 夜のあなただったら、ああいうことは出来なかった？」

クヒは背の高いデイエガの顔を覗き込むように、わざと前へと進み出た。首を傾げ、ニヤニヤと様子を覗うクヒを面倒くさそうに払い退ける。

「う……、うるさいな。昼だろうが夜だろうが、俺は俺だ。まあ、名前は別々に語っているけどな。でも、お前の言うように、昼と夜の人格が微妙に違ってきているのは確かだよ。変な生活を続けている所為か、自分が二つに分かれてしまうような錯覚に陥ることはないとは言わないよ……」

知らず知らずのうちに、言つつもりのないことまで喋つてしまう。クヒの前ではどうも、自分を偽ることが出来ないようだ。

デイエガは恥ずかしそうに彼女から視線を逸らした。

「でも、そういうところが好きなのよね。昼の『ジグ』のときの軽い感じと、夜の『ディエガ』の時の、重々しい感じ。二つが混じらずにいるところも、あなたの魅力だと思うけど？」

「あ。クヒ、お前！」

クヒの台詞に、アンテナが立ったように、あたりの空気がざわめき立つ。

「無遠慮に夜の名前を口にするなってアレほど……！」

ディエガの指摘で初めてタブーを思い出したクヒは、慌てて口を両手で押さえた。立ち止まり、息をするのも忘れて、気配を探る。

街のあちこちから、まだ日の昇りきらない午前中とは思えないくらい重々しい空気が、こちら目掛けて集まってくる。

「走れ！ 町の外まで！」

二人は軽快に駆け出した。

すつきりと晴れ渡る空、少しずつ高くなる日の光を、いっばいに浴びて。

004：汚れた包帯

港町ノアルから、北へ続く広い街道を進む。山岳地帯を抜けるその道は、北の町アンカスへ向かう行商人の主要路。所々に小さな宿場があり、旅人の疲れを癒す。

道の両脇に迫る森の匂いを感じながら、デイエガとクヒは、街道を辿っていた。

日が落ち、月が昇る。風が木の葉を擦る音が、騒がしく感じられるくらい、静かな夜。フクロウやミミズクの泣き声が遠くにこだまする、凍えるような、夜。

木々の間から覗く、星空。きらきらと瞬く天の川。星の音さえ聞こえてきそう。

ザク、ザク、と、街道の小石を踏みしめる音が、耳に焼きつく。

「このまま、歩き続けるには嫌な夜ね」

クヒが沈黙を裂いた。月明かりに照らされ、長い銀髪が淡く浮き上がる。青いローブが、森の闇に溶け込むように、暗く沈んでいる。いつも気丈な彼女の顔が強張っているのを見て、デイエガがクスクスと笑い出した。

「怖いのか？ 手でも繋いであげようか？」

自分の三步前を歩くデイエガが、少し振り向いて、にやりと見せた横顔が、酷く憎たらしい。

「遠慮するわ。あなた、本当に、乙女心というものがわからないのね」

本当は怖いのを我慢して、強がった台詞を吐く。本当は、彼の大きな背中にしがみ付きたいとさえ思っていたのに。

頬を膨らました彼女の顔は、幼く見えて、かわいらしく、愛らしい。

暗がりの中、必死に自分の背を追う彼女を気遣い、少し、歩みを遅らせる。

「それはそうと、そろそろ休むことを考えたほうがいいな。俺はいが、おまえは、限界じゃないのか？」

背の高いデイエガの影が、自分の真横まで下がってきた。クヒははつとして、重い足を前へ前へと運ぶ。

「もう少し、歩けるわ。ゴメンね、気を使わせて」

山道をスローペースとはいえ、一日かけて登ってきた。女性には堪える距離なはずだ。その上、この夜は夜風が冷たい。早く暖かな宿でも見つけて一段楽するか、思い切って野宿するべきか（できれば、それは避けたいと二人とも思っていた）、決断しなければならぬ。

無言のまま、道を進む。

と、道端に転がる、何かに気付く二人。

「……人？」

駆け寄るクヒ。思わず、両手で口を塞ぐ。

「子供だわ……！」

街道の隅に、捨てられたように蹲っていたのは、小さな子供だった。

デイエガも近づき、そつと、子供を揺り動かす。

「おい……、何してる？ こんなところで」

うつ伏せていた子供が、ごろんと力なく仰向けになった。体中を包帯でぐるぐる巻きにした、小さな身体が痛々しい。

「光をくれ……」

デイエガの呼びかけに答え、「ライト」の呪文を唱えるクヒ。持っていた杖の先、鷲の付いた大きな赤い石が、ほんのりとあたりを照らす。静かな光が、子供の姿をより鮮明にする。

痩せ細り、はっきりした年齢がわからない。十歳くらいに見えるが、もしかしたら、もつと、大きいのかも知れない。やつれた、赤茶髪の、男の子だ。擦り切れた、汚れた洋服。巻かれた包帯も、よく見れば、長い間変えられた形跡がない。かなり汚れている。

光の下で、眩しそうに眉間を顰めた子供に、必死に問いかける。

「気が付いたか、喋れるか？」

細い手で目を擦り、辺りを見回す少年。夜空の下、見知らぬ男女が、自分を覗いている。突然のことに驚いたのか、彼は身体を丸め、また蹲った。

「怖がらないで。大丈夫よ」

クヒがその背中を、優しく撫ぜる。怯えた背中は、次第にその震えから解放されていく。

「こんな山道に、子供が一人でいたら、誰だって心配するわ。どうしたの？ 帰れなくなっただの？」

柔らかい言葉、優しい声。心が、次第に解けていく。

少年は、徐に顔を上げた。

「帰れ……ないんだ……。どうやって帰ったらいいのか、わからないくて……」

「迷ったの？」

彼は首を横に振った。

「本当は、帰りたいけど、僕、もう、歩けないんだ」

曖昧な言い方だ。どうやら、わけありらしい。

「どこから来た？ 近くなら、連れてってやってもいい」

見捨てて置けない、と思ったのだらう、ディエガが少年の顔をぐっと覗き込む。

「この……、先にある、村だよ。ニベっていう、小さな、小さな村……。でも、戻っても、僕には……」

「親は？ 親はいないのか？」

「いるよ。お父さんと、お母さん。だけど、僕の話は、待ってないかもしれない……」

力なく、顔を埋める少年は、ディエガの心の中の、小さな自分と重なり合った。我慢できず、少年の細い身体をひよいと持ち上げる。そのまま、肩に担ぐと立ち上がり、歩き出した。

「待っていない親なんて、いるはずないだろ。喧嘩でもしたのか、追い出されたのか？ いずれにせよ、戻ったほうがいい」

珍しく、他人の心配をしているディエガを、クヒは物悲しい目で見ている。

例え、強く立ち振る舞っていても、本当は弱い人なのだと、クヒは知っていた。彼が、辛い過去をもっていることも。だからこそ、他人が辛そうに苦しんでいるのを見ると、放って置けず、つい、足を突っ込んでしまう。そしてまた、その先にある辛いことを乗り越えて行かざるをえなくなることも、彼女はわかっていて……、何も言わずに、彼の後を追った。

二べの村は、街道から逸れた、小高い山の中腹にあった。山小屋を十数件連ねただけの、本当に、小さな村だ。少年の倒れていた街道から徒歩で三十分。やっと辿り着いた頃には、村中が寝静まっていた。

村の入り口に、小さな宿屋を見つかる。そこで一晩、明かそうと、彼らは戸を叩く。

「こんな夜更けに……」

宿屋の女将は中年の、貧しそうな風体をしていた。いかにも田舎の、お母さん。

若い男女と連れの子供に、彼女は「ご夫婦で？」と尋ねる。「いえ、似たようなものですが」とはぐらかし、クヒは案内された寝室のドアを閉じた。

ランプの優しい明かりと、暖炉の火が、疲れ切った旅人の心を癒す。女将が気を利かせ、温かいスープを差し入れてくれた。ヤギの乳をベースにした、ホワイトスープ。身体の芯から温まる。

「お前も、一口、飲んだらどうだ？」

部屋に二つ用意されたベッドの一つに横たわるだけの少年。

もう一つのベッドに腰掛け、ディエガがそつと、スプーンを差し出す。彼は力なく首を横に振り、彼らから目を背けた。

「名前、言ってなかったわね。私はクヒ。あなたを担いできた、彼はディエガ。北へ向かって旅をしている途中よ。……あなたは？」

暖炉の火に暖まりながら、クヒは少年に尋ねた。小さな丸椅子に腰掛けた彼女の影が、ゆらゆらと少年の前で揺れた。

「……トマ」

漸く、自分の名前を口にしてくれた。少し開かれてきた心が、嬉しい。

「トマ、ずっと、気になっていたんだけど……。あなた、その包帯、どうしたの？ 怪我してるの？」

ぴくり、と、トマの背中が動いた。酷く、怯えている。

「……違う」小さな声で、ただ一言。

「随分と汚れているわ。取り替えてあげましょうか？」

席を立ち、腰の道具袋から真新しい包帯を取り出すクヒを、トマは振り向いて、キツと睨みつけた。

「駄目だ！ コレは……。お母さんが巻いてくれたんだ……。！ 新しくなんて、しないでよ！」

今までにない、大きな声に、二人は顔を見合わせた。

「ごめんなさい、そんなつもりじゃなかったのよ」

クヒは、トマに詫びるしかなかった。

汚れた包帯……。それは、トマの中で、なぜかとても大切な……ものらしい。

パチパチと暖炉の火が踊る。

奇妙な少年との静かな夜が更けていく。

朝日は、眩しいまでにデイエガとクヒの^{まぶた}の瞼を焦がした。昨日の疲れも取りきれぬうちに、無理矢理起こされた感じた。

結局、二人はまともに眠れなかった。二つのベッドのうち、一つをトマに明け渡していたため、残りの一つに二人、背中をくっつけ、窮屈に寝る羽目になったからだ。それでも、野宿よりはマシだ。

眠い目を擦り、上着を羽織ると、デイエガは隣のベッドで横になるトマを揺すった。

「……朝だぞ。おまえの、親のところに行くぞ？」

相変わらず、返事がない。丸くなった背中を無理矢理起こし、仰向けにする。その感触が、とても異様で、デイエガは思わず、彼の顔を覗き込んだ。

「死んでる……」

今、息絶えた顔ではなかった。げっそりとして、皮膚からは血の気がすっかり引いていた。目は窪み、所々腐りかけ、全体が土で汚れている。昨日の夜見た、トマの印象とはまるで違う。何が起きたのか、すぐには理解できない。

「死んでるって、どういうこと？」

デイエガの声に、クヒも慌ててベッドへ駆け寄る。そして、息を呑む。

トマの体中に巻かれた、汚れきった包帯の隙間から、皮膚病なのか、茶色く変色した斑点がびっしりと覗いていた。こんなものは、昨日は無かった。暗がりの中で、見えなかったわけじゃない。たしかに、なかったのだ。

「昨日は、話も出来たわ。ただ、とても、力なかったけれど……。どうして……？」

目の前の光景が、信じられない。諤々がくがくと、身体が震える。

クヒはトマの身体を、覆うように抱き締めた。冷たい。死体の臭いがする。心臓の音が、呼吸が……、聞こえてこない。

あまりにも突然すぎるトマの死は、苦しく、切なく、儚く。二人の心は、その姿に圧縮された大きな悲しみに支配された。窮屈に絞られた感情がどつと湧き出し、涙が絶え間なく溢れ出る。

「昨日の今日で、こうなると思うか？ 俺は、死体を担いできたのか？ 俺達は、誰と話をしていた……?!」

あれは……、あの、不気味なほど静かな夜が見せた、幻影だったのか。何かに怯えて震える背中と悲しみは、錯覚だったのか。納得できない。憤りこぼしが、デイエガの心全体を、もやもやと濁にごらせていく。

台所で朝食の準備をする宿屋の女将のところへ真っ直ぐ向かうと、デイエガは興奮冷めやらぬまま、問いただした。

「この村に、トマという子供の親はいるか」

大きな影に迫られ、女将はたじろぎながら、こくこくと頷いた。
女将から聞き出した、トマの家へと向かう。何故、トマがあの場所に倒れていたのか。何故、あんなにも薄汚い包帯を、大切そうに巻いていたのか。知りたいという気持ち、止めることは出来なかった。

村はずれの、小さく、貧しそうな農家。そこに、トマの両親がいる。

ノックもせず、ドアを開ける。穏やかな朝を阻む、大きな音。台所に立つ女性と、その側の食卓でパンを齧る男は、口をあんどりと開け、呆然とした。

見知らぬ、背の高い若い金髪の男は、食卓を蹴り上げ、男の襟元をぐいと掴んだ。

「お前が、トマの父親か？」

男は恐れをなして両手を高く上げ、首を数回縦に振った。足元に散らばったパンやコップを気にしながら、彼は後ろへ、後ろへと身体をずらした。

「トマは、死んだ、私の息子だ……」父親は、息子と同じように、力ない声で答えた。

「死んだ？ いつ？」

ディエガの赤く鋭い眼差しが、トマの父親を追い詰めていく。

「一週間も前の話だ。悪魔に、取り憑かれていたんだ……。トマの話は、やめてくれ……。お願いだ……！」

じりじりと詰め寄せられ、壁に押し付けられた父親は、涙を浮かべて懇願した。首が締め付けられ、苦しそうにもがき始める。話せば話すほど、彼の襟元を掴むディエガの手に、力が入っていく。

「や、やめてください！ どのどなたか存じませんが、何故、トマの話をするんです?!」

母親だ。台所に切りかけの野菜と包丁を残し、ディエガの背中に必死に訴える。涙声で、苦しいくらいに声を振り絞って。

「あの子には、悪魔が憑いていたんです。体中に斑点が出来て、それを隠したくて、必死に包帯を巻いたんです。でも、とうとう、村の祈祷師に見付かって……！」

悪魔……、この親たちは、病気とは知らずに、悪魔の所業だと……。息子が日々弱っていくのは、悪魔が憑いているからだ、そう、信じていたのか。

大筋で事態を掴んだデイエガは、トマの父親からゆっくりと手を離した。

解放された父親は咳き込み、倒れこむ。駆けつけた妻がその背中を必死に擦り、介抱する。

「それでは何故、トマはあんなところにいたの？ 何故、街道に倒れていたの？」

デイエガを追って、簡単な身支度を済ましたクヒが現れる。

一部始終、開け放たれた玄関から、村中に声が響き渡っていたため、クヒも、騒ぎを聞きつけ、トマの家の周辺に集まってきた村民たちにも、事情が知れ渡っていた。

たくさん目が、トマの両親に集まった。父親は、無念さで押し潰されそうになりながら、口を開いた。

「トマは、どんどん痩せ細って……、斑点は全身に出て、どうしようもない状態だった。祈祷師は、悪魔が他の者に移るといけないと言って、トマを隔離した。あの日、トマが死ぬと、彼はトマを村から連れ出した。私たちは、そこまでしか知らなかったんだ。まさかそんな、街道に捨てられていたなんて……」

トマの最期。

墓地に葬られることもなく、彷徨さまよっていた、トマの心。

医学の知識のある者のいない、小さな村。病気となれば、それは悪魔の仕業だと言ってお払いしたり、悪魔が去るまではと隔離するのは、よく聞く話だ。

教養のないこの両親は、病気は悪魔の仕業だと思い、それを村人に知られないように、必死にトマに包帯を巻いたのだ。斑点が広が

れば広がるほど、包帯の面積は少しずつ増えていき、とうとう、体中を包帯だらけにした。貧しいゆえ、新しい包帯に替えることも出来ず、あちらこちらどんどん汚れていった。包帯は、トマにとって、両親が自分を愛する証だったのだ。愛するが故に自分に巻かれた包帯を、彼は大切に思ったのだ。

「そんなに大切な息子なら、何故、祈禱師に預けてしまったんだ？ 最期まで、看取^{みと}って、抱いてあげようとしなかったんだ？ トマがどんな気持ちで、街道に横たわっていたのか……！」

デイエガは食いしぼり、己の感情を抑えて、肩を震わした。

昨晚の、トマの寂しそうな表情が、彼の胸をずきずきと刺した。

帰りたい、でも、帰れない。トマは、自分がどういう状況にいるか、理解していたんだ。自分が死んだことも知っていて……、それでも、帰りたくて、自分の村に返して欲しくて……、通りすがりの自分たちを頼ったのだ。

「トマは、私たちに言ったのよ。『お母さんが巻いてくれた包帯を、取り替えないで』って。それが、どういうことだかわかる？」

母親ははっとして、クヒを見上げた。

青色の魔女は眉間に皺^{しわ}を寄せ、目を細め、哀^{あわ}れんでいた。母親に歩み寄り、その手前に屈む。動揺する母親の肩を優しく抱いて、落ち着かせる。

「トマは、あの汚れた包帯を、自分と両親を繋ぐものだと思っただんだ。大切な、絆だと」

デイエガの頬を、つつつと涙が伝った。

「今、宿屋に行けば、トマが眠っている。俺たちが昨日の晩、運んだんだ。今からでも遅くない。抱き締めてやってくれ。これではあまりにも、トマがかわいそうだ……」

トマの小さくなった身体を、両親は漸く抱いた。

全身に巻かれた汚れた包帯が、強い抱擁にハラハラと床に零れ落ちた。頭^{あたま}わになった皮膚病の斑点を、いとおいしいように撫ぜる母親

悔しそうに、嗚咽する父親。

彼らに、薬を与えれば治る病気だったかも知れない、という認識があれば、このようなことはなかったに違いない。近くに大きな港町があつたとしても、隔離された山村というコミュニティには、医学という知識は入りづらかつたのだろうか。

二ベの村から去つた後も、心にくすぶつた靄が晴れない。

クヒは杖先の鷲を魔法で大きくし、羽ばたかせると、ノアルの富豪レギスに、書状を送つた。

『願わくば、二ベの村に、医者を派遣して欲しい。』

『知識不足から皮膚病が蔓延し、村民が息絶える可能性あり』

005：あなたの心を切り取って

アンカスの空は、透き通るような青を湛えていた。

山道を抜けること数日、デイエガとクヒの目にも、やっと、鉦山街の城壁が見えた。

尾根を連ねた岩肌剥き出しの山々に抱かれた町。それまでの緑の景色は岩砂漠に消し去られ、風が飄々と吹き抜ける赤茶色へと変わっていた。

ノアルから大陸の北側へ抜ける街道の途中にある「アンカス」の町は、炭鉱によって栄えてきた。大陸の中央を走る山脈に良質の鉦脈が眠り、石炭、鉦石等々が掘り出されている。すーっとした石炭の臭いが、街から離れた彼らの場所へも伝ってくる。

宝石職人が作り出す艶やかな装飾品がこの町の特産物。行商人たちがこぞって仕入れに来るため、年中賑わっている。噂を聞きつけ、ノアルの港からアンカスまで険しい山道を越えてやってくる旅人も少なくない。

山道からアンカスを見渡せる高台まで来ると、通行人の数が一気に増える。街が賑わっている証拠だ。

デイエガとクヒも、商人、旅人たちに混じって、アンカスの街へと入っていく。

赤レンガ造りの小さな宝石店が、町中にひしめき合うように建ち並ぶ。旅行中の金持ちや大きな荷物を抱えた商人があつちにとつちにと店を梯子し、よい品を求めて歩く。

「流石、宝石の街と言われるだけあるわ。ノアルもステキな港町だったけれど、ここはまた、別の裕福さに溢れているわね」

銀色に輝く髪をなびかせて、クヒがそう言った。

「宝石……か。興味が湧かないな」

ぶっきらぼうに答えるデイエガ。背の低いクヒの頭を見下ろして、溜め息をつく。

「石には一つ一つ、意味があるのよ。魔法使いなら誰でも知っているわ。目的にあった石を身につけたり、呪いに利用したりするの。興味がないなんて言わないで、色々勉強してみるべきだわ。あなただって、少しは魔法を使うんだから。それに、この街なら原価に近い値段でいいものが手に入りそう。助かるわ」

嬉しそうにあちこちの店を見て歩くクヒの後ろを、デイエガは面倒くさそうに付いて回った。

やがて日が傾き、天空が燃えるようなオレンジ色に染まる。東の空から次第に濃紺に変わってきた。そろそろ、今晚の宿を探す頃だ。明かりが灯り始め、店じまいが始まる。そして、夜の街が姿を現す……はずなのだが。

アンカスはそのまま眠りについてしまったのだろうか、夜になれば開くはずのパブも、通行人の姿さえもない。

薄暗い街にデイエガとクヒの二人だけが取り残された。

「……妙な街だな」

思いながら、暗めの明かりを灯した宿屋へと足を向かわせる。

しんと静まり返った街に、冷たい石畳を歩く二人の乾いた足音がよく響いた。

急いで入った宿の扉をゆっくり閉めると、クヒはデイエガを見上げ、囁いた。

「背後で、変な気配がしなかった？ まるで、誰かが監視しているような……」

「ああ。だが、魔物じゃない。人間みたいだ」

神妙に答えたデイエガの声に反応して、思わぬ人物が声を上げた。「お泊りになるのであれば、朝まで宿から出ぬことですよ、お客様。この街では、『夜出歩かないこと』が、暗黙の了解なのですから」

宿屋の主人だ。白髪交じりの主人は薄気味悪く笑うと、「何泊ですか？ お二人、ご一緒のお部屋でも？」と話をはぐらかせた。

「何かある」

ディエガは案内された二階の部屋の窓を開放し、街を見下ろした。人っ子一人いない夜の街。妙な気配。民家も宿屋も、昼間賑わっていた宝石店も、こぞって雨戸をきっちり閉め、こわごわと震えているではないか。不自然すぎる。

別の場所からも確認したいと、クヒを置いて、廊下の先のテラスへ向かう。

どうやら他にも数組客が泊まっているらしく、あちらこちらから会話が漏れてくる。

「せっかくあの長い山道を越えてやってきたっていうのに、話が違
うじゃないか！ こんなにやばいところだなんて聞いてないぞ！」

バン、と、隣の部屋の扉が勢いよく開いた。

太り気味の商人風の中年男が、大声を上げながら現れる。憤慨ふんがいしている。

「『やばいところ……？』って、今、そう言ったのか？」

声に気付いてくるりと振り向いた男は、更に声を荒げた。

「お前さんも知らずにやってきたようだな。俺も、たった今聞

いて驚いてるところだよ！」

酒が入っているのか、フラフラ千鳥足でディエガに近づいてくる。

「おい、飲みすぎなんだよ！」

中から連れらしき男の声がする。

「うっせー！ コレが飲まずにいられるか！ 大きな街だから久しぶりに美味しい酒にありつけると思いきゃ。外出も駄目、夜遊びも駄目。それもこれも、殺人鬼が出るからだとか言うじゃねえか！」

ぶはーっと、鼻に付く酒臭い息を周囲に撒き散らす。

「それが嫌なら、早々に町を出ろだよ！ それじゃあ何のためにここに来たのか、わかりやしねってんだ！ バカヤロウが！」

(なるほど、殺人鬼ねえ……。あの感じはコレか……)

ははんと、ほくそえむディエガ。事件と聞くとうずうずしてくる、嫌な性格だ。

「なあ、その話、詳しく知りたいんだが……？」

男の肩をぼんと叩き、引き寄せようとすると、奥にいた連れの男が戸口へやってきて、階段の下を指差した。

「それならな、この主人か、でなけりや、ギルドで尋ねるといい。俺たちも噂でしか聞いてなくて、実際のところどうなんだかさっぱりなんだ。ギルドは朝にならないと開かないが、主人ならまだ起きてるはずだ。カウンターに行ってみな」

「助かる」

デイエガは軽く頭を下げると、テラスへ行くのをやめ、階段を下り始めた。

「あんた、変わった人だな……。賞金稼ぎかなんかかい？ よつぱど腕っ節に自信があると見える」

酔っ払った男をなだめるように部屋に引き入れると、隣部屋の男は立ち去るデイエガの背中にそう話しかけた。

「賞金稼ぎ……？ まあ、そんなもんだ。もし、まだこの街に滞在するつもりなら、あんたらがいる間に俺がその殺人鬼とやらをなんとかしてやるよ」

階段下には、明かりが灯っていた。実はまだ宵の口。この街があまりにも静かで、身を潜めているから、夜中と勘違いしてしまいそうだが……。まだ夕飯を宿屋の一階で食べてから間もない。

カウンターの奥で、主人が帳簿をつけていた。ランプの下、宿帳を広げ、羽ペンにインクを付けて、羊皮紙に数字を並べている。

「ちよつと、聞きたいことがあるんだが」

静寂を切り裂くデイエガの一言に、主人の背中にびくつと稲妻が走った。

「お……、お客様。何用でしょう？」

震えた手でペンを置くと、のっそりと立ち上がり、カウンターの側まで来る。

「この街の秘密を知りたくてね。……殺人鬼って、どういうことだ？」

「ど……どこでそれを？」

主人はしどろもどろして、冷や汗をかき始めた。

「その怯え方、噂は本当らしいな。で？ いつから？ 見た奴はい
るのか？」

カウンターに身を乗り出し、あれこれ聞いてくる大柄な男に、主
人は恐怖を覚え、ぶるぶると首を横に振るばかり。

「心配するな。言われなかったことを責めているわけじゃない。興
味があるんだ、その殺人鬼とやらに」

「興味……？ なんとかしてくれるということか？」

「ああ、何とか出来るなら、だがな」

デイエガがそこまで言うと、主人は覚悟を決めたように、彼の耳
元までぐつと近づき、ボソツと囁いた。

「三ヶ月前、城門の側で最初の遺体が見付かったんだ。……手
足が切断された、男の遺体だ。切り口が綺麗過ぎて、明らかに『剣
で切り落とされた』とわかるものだった。それから、五日後、今度
は三人の旅人が……、殺された。今度は頭まで切り離されていた。
更に一週間後、二人の男がバラバラになっていた。あまりにバラバ
ラで、どちらがどちらの腕か足かさえわからないくらいだった。

それを皮切りに、次々と街の者、旅人が殺されていった。夜、人
気がなくなるのを見計らったように、そいつは夜の街に現れ、通行
人を殺していったんだよ。……石畳はあちこちが赤く染まり、血の
臭いが町中を漂っていた。

夜は恐ろしい。何が起るかわからない。

街の人間は、『夜は出歩くな』と言うルールを、知らず知らずの
うちに作っていた。夜出歩けば殺される。姿の見えない何者かが、
人間を切り刻むために、歩き回ってるって……」

恐怖からガタガタと歯を鳴らす主人の肩に、デイエガはポンと手
を乗せた。

「その殺人鬼、俺が何とかしてやろう。血に飢えた悪魔の顔を、陽
の下に晒してやる……！」

朝日が昇ると、夜の静けさが嘘だったかのように、賑やかな街に戻っていた。山へ向かう鉱夫、店を開ける商人、旅人の群れ。何事もなく、一日が始まる。

「気に食わないな」

ぶっきらぼうに言い放つデイエガの横顔に、「何が？」と問いかけるクヒ。

「夜、あんなに怯えていた連中が、朝になった途端、コロッと態度を変えてきた。都合のいい奴らだぜ」

「な〜にが、『都合のいい奴ら』よ。あなただって、昼と夜で名前を変えてるじゃない。ばっかみたい。そういうのを人の振り見て何とやらつていうのよ！」

宿屋からギルドへ向かう二人。商店の軒先を並んで歩く。

「うるせー。好きでやってるわけじゃねえんだよ」

デイエガが渋い顔をする。

すかさずクヒがくるんと青いローブをひるがえし、前方に躍り出て、杖の先で彼の金髪の前髪を突付いた。

「名前を使い分けるなんて面倒くさいことをするくらいならね、いつそ、夜の名前を捨ててしまえばいいのよ。どうせ偽りの名、あなたの本当の名前じゃないんでしょ？ そうしたら、私だって間違つて昼に夜の名前を呼んで、慌てて退魔陣を敷くこともないんだから」

デイエガというのは、この、背の高い金髪の剣士の夜の名だ。日が昇っている間は「ジグ」と名乗っているのだが、連れのクヒにとつて、これほど厄介なことはない。夜の名には呪いがかけられていて、昼にその名を呼ぶだけで魔物が寄ってきてしまう。これが街中だと大変だ。忍び寄る魔物の気配に耳をそはた敬て、退魔の魔法陣を敷くため、長い呪文の詠唱をすばやく終え、尚且つ、一般人を巻き込まぬようにしなければならぬ。

実に面倒だ。クヒは常々不満に思っていた。

「残念だけど……、名前は捨てられない。捨ててしまえば、旅の目的を失ってしまうばかりか、人の群れに紛れている『奴らの手先』をおびき出すエサさえなくなってしまうんだからな」

彼の言う、『奴ら』とは、呪いをかけたという、北の帝国の王。噂によると、人間ではないかも知れない、というのだ。何故、ディエガに呪いをかけたのか……？ 聖遺物を継承する勇者の末裔である彼を闇に染め、世界を混沌おとしに貶めようとしていたのか？ 二人は、その真意と、失われた名前を探す旅をしている。

宝石店の並ぶ商店街の奥に、武器屋、防具屋、道具屋と続き、冒険者ギルドの看板が見えてきた。「さあ、入るわよ」と勇み足で向かうクヒの後ろに、何故かディエガは付いて来ない。

「あら、どうしたの？ 『ジグ』さん？」
わざとらしく昼の名前で呼んでみるも、

「お、俺は遠慮するよ。待つ、待つから」
ディエガが必要以上に嫌がるのは無理もない。呪いによる闇の力のせいで、『お尋ね者』扱いにされ、賞金がかかれていたことがあったのだ。

「馬鹿ね！ 張り紙なら、レギスに頼んで、大陸中のギルドから撤去してもらったはずよ。気にしない、気にしない！ ほら！」
ぐいと無理矢理手を引かれ、渋々、ギルドへと入っていく。

街の雰囲気溶け込んだ赤レンガ造りの店内は、見かけとは裏腹に薄暗く、少しじめつとしていた。乾いた岩砂漠の中にあるこの町でそう感じたのは、店の客が汗臭い男たちばかりだったからかもしれない。筋肉質の猛者もへたちは、すらつと背の高い剣士と、場違いな美しい魔女が入ってくるなり、視線を集中させた。

壁に張り出されたたくさんの紙に、事件の解決依頼、魔物退治願い、お尋ね者、家出人の搜索……など、様々な情報が書かれている。お尋ね者の張り紙に、自分の顔のないことを確認し、ディエガはほつと胸を撫で下ろす。

「マスター、情報が欲しいんだけど……」

クヒは真っ直ぐにカウンターに赴き、色黒でスキンヘッドのギルドマスターに話しかけていた。

今まで賞金稼ぎに首を獲られるのを恐れ、ギルドに近づくことすらなかったデイエガは、店内に居座るほかの冒険者たちの視線を避けながら、物珍しそうにあちこち見渡した。

休憩所もかねたギルド店内には、簡単な食事が出来るように備えられたテーブルと椅子。五、六人の男が三つのテーブルに分かれて座っている。情報掲示板を食い入るように見る、二人の中年男。今までクヒを一人でよこしていたことを悔やむような場所だ。

自分も情報を一緒に聞こうと、カウンターに足を向けた時、デイエガは背後に刺さるような視線を感じた。振り向いた先にいたのは、角の席で頬杖を付く、若い男。背は高め、黒い服で身を固め、背に二本のブロードソード。濃紺の瞳を黒髪の下で光らせ、妖しくほくそえんでいる。その気配は夜のように重く、魔物のように冷たい。

「……だって。聞いてた？ ジグ？」

マスターとの話を終え、クヒが話しかけても、デイエガは上の空。視線の主のことが気になってしかたない。

「あの、角の、黒い服の男は、誰だ？」

思い切ってギルドマスターに尋ねてみる。

「ああ、彼ね。レイだ、レイモンド・ゴシエ。帝国軍と戦うため、連合軍隊に参加していたんだが、三ヶ月ほど前、ふらりと戻ってきてね。以来、生活資金を稼ぐためにギルドに出入りしているのさ。

腕が立つから、彼を戦力にするのも手だろうな。その分、一人当たりの取り分は減ってしまうが、元々報酬の大きい仕事だ、いい稼ぎであることに違いはない。この町の殺人鬼は、恐ろしく強いからな。油断はせず、できる限りの準備をして臨むことをお勧めするよ」

マスターの声が聞こえていたのだろうか、レイはデイエガとクヒを舐めるような視線で追っている。纏わり付くおぞましきにも似た空気を払いのけるように、二人はギルドを後にした。

「あの、レイって男が気になるの？」

装備を整えるため、一旦宿屋へ向かおうと歩きながら、クヒが尋ねた。

「デイエガは神妙な面持ちで、腕を組み、思案している。」

「お前は、気にならなかつたのか、あの気配は、多分……」

女っ気のなくなった、いつものギルド。二人がいなくなるのを見計らって、レイはすっと立ち上がり、カウンターにいたギルドマスターへと近づく。じやらんと、ポケットからコーヒー代の銀貨を取り出し、差し出す。「毎度あり」と受け答えるマスターの目を見て、レイは切り出した。

「さっきの男、ちょっと前まで、『張り紙』にいなかったか？」

賞金がかけられていなかったか、と言う意味だ。

マスターはほんの少しの沈黙の後に、

「さあ、終わった情報のことは、もう、わからないな」と答えた。

港町ノアルの大富豪レギスからの言伝で、撤去したばかりだった本当は、顔を見た瞬間にデイエガがその男だということはわかっていた。

「もし、そうだったとしても。『今、張り紙がない』ということとは、『今はそういう状況にない』ということではないのかな？」

素っ気無い返事に、レイは納得したのか、にたにたと笑いを浮かべ、後を追うように店を出ていった。

冷たい風が岩肌を滑り降り、町中を突き抜けていく。今日もまた静かな夜がやってきた。カサカサと街路樹の葉の擦れる音、虫の聲が身を潜めるように鳴く音が聞こえる。月明かりがほんのりと照らし、民家や商店のシルエツトを浮かび上がらせていた。

デイエガとクヒは、町の大広場の噴水の前に居座り、敵を待った。クヒがせつせと昼間買った小さな石をあちこちに並べている。何

か、彼女なりに準備をしているらしい。

「無駄だな。邪魔になるだけだ」

屈んで作業していたクヒは、デイエガの一言にカチンときて、むつくりと立ち上がった。残りの小石を右手でぎゅっと握り締め、ジヤリつという嫌な音を奏でると、噴水池の縁のレンガに腰を下ろしたデイエガのそばにぐっと迫ってきた。

「あらあら、随分余裕ですこと。何か勝算でも？」

小石の簡素な魔法陣が石畳の上に描かれている。威力は弱いが、足止めや魔法の的に使えるもののようにだ。

「それって、魔封じの結果なんかじゃないのか？ わかってないな。今日の相手には無効なんだよ」

「どういう意味？」

腰に両手を当てて、デイエガの顔ばかり追っていたクヒは、背後の気配に気付かなかった。黒い影が二人を覆う。ぞわつと、虫唾むしずが走り、彼女は慌てて後ろを振り返った。

「こういう意味だ！」

一瞬の間に、デイエガは彼女の懐から背後へ回り、背の剣を抜き、影の攻撃を受け止めた。真っ黒な人型が、二本の長剣でにじり寄っている。

「あ、あなたは……！」

言葉を失うクヒ。

目の前にいたのは、昼間、ギルドで見かけた男……、レイモンド・ゴーシエだった。色の濃い皮の防具と、上から下まで真っ黒な服。黒髪が夜風になびき、暗く沈んだ青い瞳が月光に照らされ、彼の殺気だった表情を更に引き立てる。闇に酷似した黒が、彼を支配していた。

「やはり、お前だったんだな。この町の殺人鬼ってのは」

デイエガの問いに困惑する様子はない。

お互い、こうなることはわかっていた、そんな様子だ。

力が均衡し、剣が離れた。一步、二歩と後退し、タイミングを計

る。

「そつちこそ、何者だ。その気配は……、人間じゃないな？」

ブン、と剣を鳴らし、レイはデイエガを睨んだ。

「いや、残念ながら。『まだ』人間だよ？」

デイエガが意味深に答える。

「『まだ』？ へえ。やつぱり、只者じゃない。フフ……」

先に攻撃を仕掛けたのはレイだ。右足で踏み出し、円を描くように右手のブロードソードで斬りかかる。

刹那、側にいたクヒを小脇に抱え、デイエガは噴水を飛び越えた。大きな音を立てて、噴水縁のレンガが崩れた。レイの剣が砕いたのだ。

「危ない、離れてろ！」

着地、彼女を突き放し、向き直る。

風を切って、レイもこちら側へ噴水を飛び越えてきた。足が地面に付くと同時に、左の剣で攻撃。ザクツと、デイエガの上着の裾が切れる。

「まだまだ！」

右、左、交互に刃先が襲い掛かる。通常の二倍の攻撃量、スピードも速い。

「どうした？ 受け流すだけか？ 攻撃して来いよ！」

攻撃して来ないデイエガに嫌気が差したのか、レイが挑発してくる。攻撃がどんどん重くなっていく。勢いに押され、終には広場に面した商店の壁まで追いやられる。

大きく剣を振り上げるレイ。チャンスとばかりにデイエガが懐に斬りかかる。彼のこの動きを読んだか、さっとレイの体の軸がずれ、剣先から免れた。体勢を立て直し、再び両手の剣を構え、攻撃のため、肩を揺らす。デイエガが今まで攻撃してこなかったのは、パターンを読み取るためだったと気付く。

後方で魔力を感じ、レイは慌てて振り向いた。青い魔女が呪文を詠唱している。

「スロウー!!」

すばやさを封じる魔法、レイのスピードが落ち、思うように動かない。

「くそっ……」間合いが縮まれば逆に不利になる、慌てて後退する。

「さて、今度はこっちから行かせてもらうぜ」

にやりと不敵な笑みを見せると、デイエガはロングソードを振りかざした。「ファイア!」という声とともにクヒの魔法が剣身に降り注ぐ。炎を滾たぎらせた剣、ぎらぎらと輝き、闇を照らす。

「魔法剣……?!」

予想外の展開に驚くレイ。それもそのはず、魔法力に自信がなければ決してできない技だ。力が弱ければ剣は魔法を帯びず、また、強すぎれば剣士共々魔法の犠牲になる。魔法を受ける側にもそれ相應の魔法耐性が必要であり、そういう意味では、二人とも、かなりの使い手だということは目に見えて明らかか。

(あの魔女も、只者ではなかったのか……!)

赤く燃え上がった剣先が、レイに襲い掛かる。明らかに、形勢逆転……。

ガツと飛び込んだデイエガの剣を受け止める、炎の魔法で熱を持ったデイエガの剣から、レイの剣に熱が伝ってくる。熱い、両手が焼けるほど熱い。堪らず、力が抜ける。隙を突いてレイの胸元を炎の刃が走った。ジュツと布が焼ける音、そして、激痛。切り裂いたのは上着だけではなかった。分厚い皮の胸当てを貫通し、肌、内臓の一部まで達していた。血は炎の熱で瞬時に固まり、痛みほど溢れては来なかったが、これほどの痛みは味わったことがない。気が付くと左手から剣が落ち、レイは無意識に傷を掻きむしきついていた。

このままではやられる、思ったとき、ふいに距離を置いて次の攻撃に備える魔女の姿が目に入った。レイにとって、この時、幸運が重なる。かけられていたスロウの呪文の効果が無防備になったうえに、彼女が呪文の詠唱のために両手で杖を持ち、無防備になったのだ。

今しかない、レイは魔法剣を振り切り、すばやくクヒの背後へと

回った。杖を持つ両手ごとぐつと引き寄せ、右手を捻り、剣の刃先を彼女の喉元に当てる。

「な、何をする気だ！」デイエガの動きが止まる。

「決まってるだろ……、解体シヨードだよ。最近、この辺の奴らの警戒心が強くて、なかなか出来なかつたからな、久々に……クククツ。よく見れば刻み甲斐のある、綺麗な身体じゃないか……」

眼下に冷たい刃が光る。少しでも動く切れそうなほどに。クヒは大きく息を吸い、ゆっくり吐いて、気を落ち着かせようとしていた。汗で湿ったレイの左手が、彼女の顎あごに触れ、撫で回される。屈辱、それでも動けない。

「血が見たいんだよ……。泣き叫ぶ声が聞きたい……。わかるだろ？ 同じ臭いのする、お前には……」

レイは上目遣いでデイエガを嘲笑する。

少しでも動けば、クヒに危害を与えかねない、デイエガはゆっくりと剣を下ろした。このままでは、攻撃することも、近付いて彼女を解放させることも出来ない。歯がゆく、むかむかしてくる。

「どこからがいい？ 腕？ 足？ いや、この形のいい乳房から……」

「……？」
いやらしい手付きでクヒの体のラインを撫でてくる。

「やめろ……」

はちわた腸が煮えくり返りそうだ。デイエガの体から、今までぐつと抑えていた闇の力が溢れ出る。

「ほら、思ったとおりだ。お前のその気配、帝国との戦いで感じた、あの気配に似ている……。連合軍隊をゴミのように蹴散らし、生きた人間があつという間に肉塊に変えられた、あの時感じた、魔物たちの気配に……。ギルドに以前貼つてあつた張り紙を見たぞ。なんて書いてあつたかな、『殺人鬼』？ 『化け物』？ どつちにせよ、血に飢えた悪魔に他ならないんだろう？ お前だつて欲望のまま、血肉を啜すすりたいと思うことが、あるんだろう？」

レイの言葉は、彼の怒りを増大させていった。はじめは霧のよう

に漏れていた黒い霧霧が、気付けば嵐のように彼の周囲を渦巻いている。髪の毛が逆立ち、目が獣のように光り、全身の筋肉がびりびりと電気を帯びたように震えている。

「本性を現すか……？ 魔物が……！」

レイの嬉しそうな声、子供がおもちゃを与えられた時のような、無邪気な。しかしその中に、恐怖と絶望の色が混じっているのが、クヒには見えた。

「いいの？ あのままでは彼、あなたを倒すどころか、この町ごと消滅させてしまうわよ？」

横目でレイの動きを見ながら、クヒは首もとの剣が少し離れたのを確認して、話しかけた。

「苦しいんでしょ？ 苦しいから、こんなことをして、気を紛らわせているのね？」

レイの表情が歪んだ。

「何がわかる……、何も知らないくせに、勝手なことを言うな！」
クヒの言葉に揺り動かされているのか、レイの身体は微かに震えている。

彼女の耳元で、レイの鼓動が苦しそうに悲鳴を上げはじめていた。
「ええ、わからないわ。生きていく苦しみを嫌なほど味わっている私たちから見れば、あなたのやっていることなんて、幼稚で、無意味で。その先に、明日があることを知らない、可哀相な子供のやることだわ」

「うるさい！」

「あなたの、その、心の痛みの一部でもいい、切り取って、私に見せてくれない？ 罪は決して簡単に消えるものではないけれども、あなたの中の悲しみは、癒すことは出来るはず。こんな茶番な殺人劇は、もう終わりにしましょう？」

クヒの柔らかい声は、レイの硬く閉ざされていた心の扉を、すこしずつ、すこしずつ、開いていった。温かく、染み込んでくる言葉の一つ一つが、魔法を帯びているように。

「殺されるのが、怖いのでしょうか？ それは誰でも同じ。あなたに刻まれた人間達だって、今のあなたと同じ気持ちになっていたでしょうに。ディエガの力の解放で、少しでも、犠牲者の気持ちがかかり始めているのだとしたら、私にだって考えがあるわ。　こんな卑劣なことをされたけれども、私はあなたを助けたいのよ」

助けたい、などと、一生自分に向けられるはずはないと思っていた言葉。レイは、たったそれだけの言葉に、光を見ていた。彼女の温もりが、柔らかな魔力が、荒んでいたレイの心を照らしている。

「どうすればいい……？　あいつは何者なんだ？　どうしたらいいんだ？」

とうとうレイは、クヒの首に当てていた剣先を外した。

「彼を倒すのは、初めから無理。あの力が暴走すれば、私にだって止めることは出来ないの。でも今ならまだ間に合う。足元を見て。念のため、私が敷いておいた魔法陣がある。彼をそこに誘導して。後は私がなんとかするわ」

杖を構え、前を見据える彼女に、レイは尋ねた。

「一体、どういう関係なんだよ。味方に攻撃魔法を仕掛ける気か？　クヒはくすつと、軽く笑って、目を閉じた。

「そうね、彼は、仲間だけれど、敵なのよ。　ほら、急いで！」
急ぎ立てられ、レイは噴水の側に作られた、小石で出来た魔法陣まで走った。

剣を構え、威嚇。我を失ったような瞳で、ディエガが攻撃してくる。これまでの倍以上の力で押される。だが、やられるわけにはいかない、堪え、一歩、また一歩と後退しては魔法陣へと誘導する。そして、

「今だ、頼む！」

ディエガの体が魔法陣へとすっぽり入り込み、石が反応した。

クヒは構えた杖の先から、天に向け、魔力を放出……。空高く昇った力は、雷に姿を変え、ディエガのいる魔法陣へと降り注いだ。

デイエガが目を覚ました時には、既に昼を回っていた。

一昨日から泊まっていた宿屋のベッドの上。なぜだろう、頭痛がして、全身がピリピリ痛む。

見渡すと、クヒがベッドにうつつ伏せて寄りかかるようにして眠っている。

昨晚、ギルドで出会った、黒服の男……レイと戦い、クヒを人質にとられたところまでは覚えているが、その後の記憶が一切ない。嫌な予感がする。

「もしかして、また……！ しまった……！」

頭を抱え、もしかやもしかと髪の毛を掻き回した。

「随分と面白い奴なんだな、実は」

聞きなれぬ男の声に、デイエガははっと、身体を起こした。部屋の壁に寄りかかって、人がいる。男だ。上から下まで真っ黒な……。「レイモンド・ゴージェ！ な、なんでここに！」

ありえない、どうなっているんだと、驚きを隠せないデイエガに、レイは落ち着いた声で言った。

「彼女が、お前を止めて、ここまで連れて来るよう指示してくれたんだ。ありがたく思え」

やっぱり、何かやらかしてしまったんだ、と、自分に言い聞かせてみたものの、納得できない。

「この町で、人を殺すのはもう辞めた。これで事件は解決。私は人殺しよりも、興味のあるものを見付けてしまったんだよ……」

「はあ？」

確かに昨日よりぐっと大人しい目つきになったレイの目線の先には、すやすやと寝息を立てるクヒがいた。

「まさか、興味の対象って……」

にやり、と、意味深に笑うレイ。

「じよ、冗談だろ……」

レイが犯人だったとギルドに告げることも出来ず、報酬もなし。
ディエガはその日一日、ぐったりと力が抜け、ベッドから出られ
なかつた。

006：赤い傷跡

東の山陰から出ずる陽は柔らかく力強い光を放ち、岩山の静寂が音もなく碎かれていく。小鳥の囀りに耳を傾ければ清々しく、町の中央広場の噴水の音もまた、涼しさを誘う。朝焼けが赤レンガの町を覆っている。これから一雨来るらしく、この地にしては珍しく湿った風が吹き始めた。

岩砂漠の広がる険しい山々に囲まれたアンカスの地には、雨は殆ど降らない。いつも乾いた空気と、照りつける太陽の日差しで、町は燃えるように暑い。今は丁度、雨季に入り始めた頃で、やっと待ち待った雨が降ってくる。町のあちこちに植えられた木々も、民家の軒先の花たちも、動物も、この季節をじっと待っていた。

雨季、じつくり降った雨は大地にしみこみ、やがて地下水となり、市民の喉を潤す。地下水を利用してある広場の噴水は岩砂漠のオアシス。涼を求めて市民が集まり、憩いの場となる。また、長い山道を抜けて辿り着いた旅人や商人たちの命の水でもある。

町が目覚めると、にわかに噂が広まり始める。
「どうやら、殺人鬼と決闘する者があつたらしい」

アンカスでは三ヶ月ほど前から、連続殺人騒ぎがあり、夜な夜な出歩くことは大変危険だった。見境ない殺しの手口。遺体をバラバラに切断してしまう。に、恐れ戦き、窮屈な生活を強いられていた。日が落ちると速やかに雨戸が閉められ、夜の店は軒並み営業停止、観光客に行商で溢れかえる町にとって、大変な痛手であったに違いない。ギルドでは事件が始まった直後から、報奨金を上乗せして兵を募っていたのだが……、あまりの恐ろしさに、名乗り出るものはいなかった。そのことがまた市民を震えさせ、事態は収拾することなく、三ヶ月の間に延べ十数人も犠牲を出すことになる。

旅の途中、アンカスに立ち寄ったデイエガとクヒは、この噂を耳にし、殺人鬼を倒すべく、夜の街に繰り出した。事実その犯人はか

なりの使い手で、簡単に決着は付かなかった。しかし、犯人が魔女クヒを人質に取った途端、事態は急変した。セーブしていたダイエガの中の闇の力が、暴走を始めたのだ……。

夜明け前にガタガタと物音がし、クヒと黒ずくめの剣士に肩を借りたダイエガが宿に戻ってくると、宿屋の主人は目を丸くして三人を凝視した。青いローブの魔女クヒは、怪我こそしていなかったが、かなりの疲労で、ぐったりした様子。その前の晩に「殺人鬼を倒す」と豪語していたダイエガは半ば意識がなく、二人に引き摺られるように宿に入る。主人を更に驚かせたのは、二人に同伴したもう一人、アンカスで名を知らぬものはない、孤高の二刀流剣士、レイモンド・ゴシエの存在。胸にざつくりと刀傷があり、彼も一緒に戦ったのは目に見えて明らかだった。主人は考えた、あの客はレイを仲間に引き入れ、三人である忌まわしい殺人鬼を破ったのだと。そうして、噂は瞬く間に町中に広まり、陽が天高く輝く頃には、町中の誰もが、三人の栄誉を称えていたのである。

しかし、この噂は宿屋の主人の勘違いから生じた、架空の話。事件の真相は意外なところに隠されていた。

クヒは宿のベッドで力尽きたように寝入るダイエガの髪の毛を、そつと撫ぜた。彼の金髪は朝日に輝き、穂の傾いた麦畑のような、美しい色を紡いでいる。昨夜の死闘が嘘のように、安らかな眠り。ベッドに寄り添い、彼の寝息を愛しむ。

「ありがとう、私一人ではここまで連れて来れなかったもの。感謝してるわ」

流れるような銀髪を揺らし、クヒは静かに微笑むと、窓のそばで壁に寄りかかる男に話しかけた。

泊まっていた宿の二階からは、町がよく見渡せる。赤レンガの積み重なったどこか懐かしい景色は、この地の暑さと、厳しさを物語っていた。昨日の舞台、噴水広場に群がっている人垣。砕かれた大

小のレンガ、刀傷をまじまじ眺め、戦いの様子でも想像しているのだろうか。朝日に当たって小さくキラキラ光っているのは、クヒが魔法陣に使用した石の欠片のようだ。円の形を崩して転がったままになっている。

黒ずくめの剣士レイは向き直り、深い青色の瞳で訝しげに彼女を見た。腕組みし、暫く間を置いた後で、

「いくつか、質問してもいいかな？」

と、低い声で尋ねる。

彼女は少しドキリとしたが、覚悟を決めたのか、身体を起こし、毅然とした態度で剣士を見据えた。

「いいけど……、その前に、彼が切った傷を診せてくれない？ 少し、傷口を塞ぐから」

剣士レイモンド・ゴージェは他でもない、昨晚戦った殺人鬼だった。デイエガの力の暴走を鎮める手助けをし、更にここまで運ぶのを手伝ってくれたとはいえ、クヒは彼に簡単に心を開くわけにはいかなかった。

それでも彼女は普段と同じ調子で語りかける。

空いているもう一つのベッドにレイを案内し、防具を外させ、上着を脱がす。そっと手を添えて徐々に彼の体を横にすると、両手で傷口をなぞった。左の胸から右下腹部にかけて、長く線を引いたような真っ赤な傷が残っている。

柔らかく、温かな指先がレイの肌に触れると、それだけで彼は興奮し、体の隅々まで血がどつと押し寄せてしまう。彼女の甘い吐息がレイの耳元で囁くように聞こえてくると、更に興奮が増す。見れば見るほどいい女だと、レイはまじまじと彼女を見つめた。知性と品格の塊のようなこの女性に、どんどん引き込まれていく。さらりとしたストレートの銀髪は光に透けるほどに輝き、彼女の紺碧の瞳は深い海を称えるよう。レイが出会ったどの女性よりも、魅力的。

「まだ、痛むでしょう？ 少し深く抉れたみたいだから、完全には治らないかもしれないけれど……」

驚飾りの付いた木の杖を、横たわったレイの身体に添うようにかざし、クヒは目を閉じる。

杖先から淡く光が漏れていく。魔法の光、温かな、心地よいものが、柔らかくレイを包んでゆく。今まで足りなかった何かが補完されるような、満たされた気持ち。治癒魔法を受けているだけだといふのに、この感覚は何なのだろうとレイは思う。魔力だけではなく、彼女の心が降り注ぐような、そんな感触さえ覚えてしまう。

「どうして一思いに私を殺さなかった？」

思わず、レイの口から漏れた台詞。

クヒは一瞬、眉を動かした。

「殺さなかったんじゃない、殺せなかったのよ」

静かに、言い捨てる。

「どうして？ 一思いに殺してしまえるほど、彼は強かったんじゃないのか？」

「ええ、そうね」

「じゃ……、どうして？」

暫くの沈黙。

クヒはふうつと溜め息を吐く。

「あなたが、人間だから」

ポツリと零した言葉には、悲しみの色が混じっていた。

「冗談言うな、そんな理由で……！」

力が入り、上半身を起こそうとするレイ。

クヒはそんな彼の肩を優しく抑え、治療を続ける。

「冗談なんかじゃないわ。とても大切なことよ。私と、彼にとって
は」

厳しい眼差しでレイを見つめ返す彼女は、嘘を付いている様子など見受けられないほど、真っ直ぐ。自分がした質問があまりにも愚直で、恥ずかしくなりそうなくらいに。

「あなたは、魔物じゃなくて、只の人間。悪しき思想に駆られ、殺人を繰り返していたとしても、彼はあなたを裁くことは出来ない」と

思ったのね。だけれど、私はあなたを　出来れば、ギルドに突き出して、報酬を得るつもりよ。彼を運んでくれたことには感謝するけれども、それ以上の恩はないもの。この町の市民の手で、あなたは裁かれるべきだわ。そして、悲しみを残酷な行為で拭い去ろうとしているあなたの軽はずみな行動が、如何に愚かで無意味であったか、思い知るべきよ。私たちの手で切り裂かれるよりも、この町の中で、一生、恥辱をもって懺悔するがいいわ」

残酷な言葉が連なる。怒りを抑えた彼女の台詞は、レイの心にチクチクと刺さった。

「随分、悟ったような言い方をするんだね」

「悟らざるを得ないような状態だからよ、私たちが」

「それは、彼の正体とどこか関係がある？　その男の気配は異常だ。私が出会った人間で、これほど邪悪でどす黒い気配を持った人物はいなかった。この気配は、人間というより、寧ろ魔物に近い。北の帝国の死の軍団のような、陰湿で悪質な気配。それを必死に隠しているかのような……。違う？」

レイの指摘に、クヒははっとした。無意識に、杖を握り締める両手に力が入る。

「あなたの言うとおり。彼は暗黒に蝕ほしまれている。見た目は人間でも、その溢れる瘴気によって、いずれ魔物になってしまおうでしょうね。闇に吞まれるのは、辛いわ。いつでも自分という人格を保つために、彼は必死。平静を保てなければ、昨晚のように自分を失う。自分から、闇に心を投げようとしていたあなたとは、違うのよ、レイモンド」

「レイ、でいいよ。その……。『暗黒に蝕ほしまれている』というのは、つまり、何かの呪いで……？」

「あなたに多くを語る必要などないと思うけど？　彼が目覚ましたら、ギルドに突き出して、あとはさようならをするだけなのよ。私たちは、一時の夢。偶々立ち寄った町たまたまで起こった怪事件を、興味本位で覗き見したに過ぎない。だから、忘れて頂戴、私たちのこと

など。通り過ぎた一陣の風だと思って、なにもかも、すっかりと。

例え、今、木の枝に引つかかってしまった木の葉の如く、気に掛かることがあったとしても、いずれ風が吹き飛ばし、終いには跡形もなくなってしまうように……、気に留めるべきではないし、気に留めてほしくないのよ。わかって？」

気丈に語るクヒの肩が、震えている。

レイは静かに目を閉じ、ずっと引つかかっていた言葉を、喉の奥から引きずり出した。

「北の……帝国軍と戦った時のことなんだが……」

彼の脳裏に、真っ白な雪原が浮かび上がった。

連合軍隊の一人として、剣を握っていたあの日。真っ白な世界に血が舞い、赤い斑点が当たり一面に飛び散っていた。相手方の兵士はアンデッド……、切っても切っても手ごたえが無い。何度も起き上がり、襲い来る。

敵の大將は闇のような鋼鉄の鎧。一回り大きな身体、中身は魔物に違いない。雪原にいるからではない、あの邪悪な気配によって、身が引き裂かれるような冷たさを感じるのだ、とレイは直感した。

「その、敵の大將が、恐ろしいことを言っていた……。『勇者の末裔は既に闇に堕ちた。人間共の希望など、潰つぶえている』あれは、どいう意味だったんだろうと、ずっと考えていた。考えているうちに、仲間が次々に殺された。さっきまで一緒に話していた連中が、いつの間にか只の死肉になっていった。あの場所で、正気を保つことなど、不可能だった……」

いつしか、私は自分の剣で切り刻む感触を感じることをだけを、生きていく証だと、思うようになっていた。旅人、商人、女、子供、見境なく殺しを続けた。この町に戻ってから、人を斬る時の充実感を得たくて、とにかく、斬った。魔に取り憑かれていたと言えは嘘になる。私は、自分の意思で、『殺すための殺し』をするようになった。

あなたのこの治療は、無駄だ。せっかくだけれど、私は完治すれ

ばまた、人を殺し始める。あなた方の信念で、治すべき傷ではない
！」

驚くほど、冷静に話している自分に、レイは驚いた。自らの言葉で、犯していた罪の重さに、少しづつ気が付いていく。耳に残る悲鳴、血、切り裂かれた体、内臓、首……。ぐるぐると瞼の裏に浮かんでは消え、消えては浮かび。

「それと、これは、憶測なんだが、あなたと彼は、その、『未裔』ではないのか？ あなたは言っていた、『仲間だが、敵だ』と。あの男の気配の黒さは、帝国によって仕掛けられた呪いで、それが時折、昨晚のように噴射するのをあなたが抑えているのだとしたら。ギルドにあつた張り紙がなくなっていたのは、事情を知って支援するものが現れたのだとしたら。全て辻褄が合う気がするんだが……」
ゆっくりと目を開け、レイはクヒを見上げた。

彼女は目を逸らし、俯き加減で囁く。

「レイ、あなたが何を考えているのかわからないけれど、これだけは言っておくわ。『罪は簡単には消えない』のよ。あなたのこの赤い傷跡のように……」

クヒは治療をやめ、かざしていた杖をそつとベッドの縁に置いた。腰袋から、一つまみの小石を取り出す。この町の宝石店で買った、呪術用の宝石の欠片だ。まだ治りかけのレイの腹部に円を描くように石を配置する。

首を持ち上げ、不思議そうに腹の上を観察するレイ。

最後の石を置き終えると、クヒは静かに合掌し、呪文を詠唱する。耳慣れない言語が室内を巡る。優しく強く、それでいてどこか悲しげな彼女の念が、円を突き抜け、レイの身体に降ってくる。青白い冷たい光が鋭い刃になって、傷跡に容赦なく突き刺さった。痛い、どころの話ではない。苦しい……、傷が焼けていくようだ……！

夕方、デイエガはやっと起き上がり、一階の食堂へ降りた。

宿泊客がまばらに夕食をとっている。昨日までとはどこか雰囲気
が違う。殺人鬼の事件が片付いたという噂のせいなのだろう、客の
表情が明るくなった気がする。

奥の席でひとりゆったり茶を楽しむクヒは、まだ疲れが抜けきつ
ていないのか辛そうに、頬杖を付いていた。湯気の立たない紅茶を、
空ろな眼差しで見つめる彼女をみて、デイエガは大きく息を吐く。
ひとり、一日分の飯を一度に注文すると、そのままクヒの隣の椅子
に腰かけた。

「昼間、目が覚めたとき、あの男が部屋にいたぞ。どういうことだ
？ 俺にはさっぱりわからん」

彼女の冷え切ったカップを奪い、ぐびぐび飲み干す。

「彼は、気絶したあなたをここまで運んでくれたのよ。明日にはギ
ルドに差し出す。真相を話して、あとはギルド次第ね」

「それはそうとして……。大丈夫なのか、放しておいても。あいつ
は、残虐非道の殺人鬼だぞ？」

二人のテーブルに、「おまちどうさん」とパンにスープに肉料理、
それにワインが次々と運ばれてくる。デイエガはうまそうに頬張り
ながら、ちらちらとクヒの表情を覗いた。

「大丈夫よ。もう彼は、人を殺すことなんて出来ないから」

「ふーん？」

「あなたが斬った、胸の傷跡に、呪いまじなをかけたの。約束不履行の場
合、身を焦がす、あの呪いよ。ほら、私の背にあるのと同じもの。
だから、彼が人を殺めるあやことはないと思うわ」

「それ、効果、あるのか？」

「あら、あるわよ。その証拠に、私は、約束どおり、あなたと旅を
続けているわ。あなたが例えどんな姿になろうとも、私はあなたの
側にいるから。『もし、闇の力が完全に支配して、あなたがあなた
でなくなつたときに、聖遺物インフィニティであなたを殺す』

そういう約束でしょ。嫌な役回り、最初は逃げたくてたまらなくて、
辛かったけど、今は、案外これが心地よかつたりするのよね」

クヒはそういつて、につこりと笑った。

「……覚えてるよ。おまえの背中に烙印が押され、ファイ様が呪いをかけたときのこと。あの悲鳴は、一生忘れない。幾ら俺のため、延いては、この世界のためにと言っても、この枷かせはあまりに重くないか？ もう、後戻りはできないんだぜ？」

くちやくちやと下品な音が、デイエガの口から台詞とともにリズムよく漏れる。手元のワインをぐび飲みし、ぷはーっと一息。口から伝う肉汁を手の甲で無造作に拭い、また、食べ物を詰め込んでいく。

「ま、それはそうとさ」

と、口に食べ物詰まったまま、またくちやくちやと話し出す。

「あいつ、お前に惚れたらしいぞ。何喋ってたんだ、俺が眠ってる間」

「別に、たいしたことじゃないわよ。『簡単に死ぬなんて許さない、苦しみながら生きなさい』という意味の言葉を少し連ねただけ。彼の心に、私の言葉がどれほど響いたのか、わからないけれど、憑き物が取れたような優しい顔になっていたわよ」

次の朝、デイエガとクヒはレイを連れ、ギルドを訪れた。

アンカスの町で起きた連続殺人犯が、屈指の二刀流、レイモンド・ゴーシエであったことを告げられると、ギルドマスターは腰が抜けるほど驚き、事態を理解するのに、相当時間がかかったのは言うまでもない。レイは素直に身柄をギルドに預けた。商店街合同で用意していた報奨金は見事、デイエガたちの懐に納まり、全てが終わった……かのように見えた。

町の英雄と思われていたレイの起こした非道な行いに、どよめきが起こき、今度はその真実を巡って、様々な噂が飛び交うようになる。殺すべきだの、生かして罪を償わせるべきだの、あちらこちらで言い放題。

結局、ギルドは彼を生かすことにした。町の全ての人への陳謝を込めて、レイを衛士として守りに就かせた。彼の働きは素晴らしかった。真面目で、誠実に、任務を遂行した。それでも、罪を犯したものにへの視線は冷たい。いくら懺悔しても、理解は得られない。『罪は簡単には消えない』、という、クヒの言葉の通り、いつまでもいつまでも、レイの心を締め付け続けた。

007：喉元に突きつけられたナイフ

山道の途中の山小屋で老女に貰った香の入った袋を、両手でしっかりと握るクヒ。ぽつぽつと落ちてくる雨粒に濡れないよう、前屈みになりながら、前を歩く剣士の男に付いて行く。離れないように近づき過ぎないように、距離を測り、前日の雨で出来た泥濘ぬかるみに足取られぬよう、気遣いながら、ゆっくりゆっくり進んだ。

岩砂漠の町アンカスに、もうすぐ短い雨季が来る。明るい日差しはなりを潜め、しばしの休息。雨水を待ち焦がれた街路樹も、花たち、道端の雑草たちも、鮮やかな緑を一杯に広げて雨を乞う。

そんな季節になると、それまで賑わっていた街道が、ひっそりと静まり返る。行商人にとつて、雨季の山道通いほど辛いものはないからだ。南のノアルへと戻る者、東の細い獣道を通り、海岸沿いを北上する者、西の傾斜の緩やかな道を、宿場を伝って歩く者……、皆一様に街を去って行く。

この旅の二人もまた、人目を避けるように旅立った。街の誰にも挨拶することなしに、北の坑道へと続く、山道へと向かっていった。北の王都ラージアへ続く坑道は、かつての金脈。採りつくされ、今ではすっかり赤い山肌に大きく開いた坑道の入り口が、時折吹き込む風の音で、びゅうびゅうと不気味な音を立てている。

坑道が開けるまで、王都へは、南の港町ノアルから大きく山脈を迂回し、海端を北上するしか方法がなかった。半月以上かかってしまつ上、海岸からの強風と荒波が一年中押し寄せる断崖絶壁の道を、危険を冒して旅していたのだ。坑道は、念願の王都への近道だったところが、王都へ繋がって間もなく、魔物が巢食ってしまった。腕に自身のあるものと一緒か、でなければ、魔物が嫌うという香を四六時中焚きながら、守りの呪詛を唱えて歩かねばならない。いずれにせよ、道は険しく困難で、好き好んで王都へ向かうものなど、なにに等しいのが現状だ。

それでも、その旅人二人が坑道へ向かうのは、人には言えぬ重大な使命を胸に秘めているからなのだろう。濃紺の戦士服に黒いマントをなびかせた、金髪赤目の軽装の剣士と、薄い青色のローブに、銀髪の美しい魔女は、神妙な面持ちで山道を登る。

雨季の重たい雨雲が、徐々に頭上に延び、やがて視界全体に暗黒が広がっていく。生温い風が頬を掠め、砂を舞い上げながら過ぎ去るのを、剣士デイエガはいじらしく流し見た。

赤い岩山を上り、背の低い常緑樹の間を通る。視界に、平らに均された資材置き場の跡地が出現、その奥に広がる四方の大きな穴。湿ったひんやりとした風が、穴の奥から静かに吹いていた。

坑道の入り口に、二人は腰を下ろす。クヒはそこで、小さな丸い水色の香炉を、身に着けていた道具袋からそと取り出した。老女に貰った香を数匙炉に入れ、火を点ける。香炉の蓋を閉じ、上部に空けられた、小さな花模様の穴々から、白い煙が立つのを確かめてから、ゆっくりと立ち上がった。つんと鼻につくハーブの香りと、どこか甘い幻想的な香り。その中に、毒々しい生臭さが混じっている。

「ちょっと、受け付けない臭いだな」

デイエガは鼻をつまみ、渋い顔。

「そうね、慣れるまでは、ちょっと、厳しいわね。だけれど、これがないと、この先進めないわ。行きましよう」

クヒは先ほどとは逆に、剣士の前に立って歩み始めた。洞穴の、奥へ、奥へ。

人が作り出した穴は、綺麗に四角に切り取られていた。落下防止の木枠が均等に、壁や天井に打ち付けられ、幾重の門を通過するかの如く続く。足元には、金山時代に土を運んだトロッコのレールが入り口から続いており、いくらかの段差がある。慎重に歩かねば、足を取られて転んでしまいそうだ。ふと視線を上によれば、作業中に使っていたと思われるランプが、あちらこちらの壁で炎の熱を恋しそうにぶら下がっている。

金脈を探すために掘られた道は、何差路にも分かれ、地図なしに歩くことが出来ないほど入り組んでいた。ここでは、やはり老女に渡された、迷路のような坑道の地図が役に立つ。

ライトの呪文で淡く光る、クヒの杖先。松明代わりの明かりは、狭い空間には十分すぎるほど明るく感じられた。しかし、もう片方の手で香炉を持つ彼女の足取りは、どこか不安定。細い体が時折、つまづきそうになって揺れるのを、デイエガは危なっかしそうに思いながら歩いて歩く。しっかりとっているようで、本当は頼りないのだと、これは、本人にはいえないのだが、デイエガは知っている。

土からの湿気で、空気全体がカビ臭い。更にクヒの持つ炉からの香りと、延々と続く守りの呪詛が、脳みそを刺してくる。デイエガの視界は次第にぼやけ、視点が定まらないくらいの吐き気に襲われ始めた。喉の奥から何かが逆流しそうになるのをぐっとこらえ、右手で顔全体を擦る。臭いというものが、ここまで自分を追い詰めるのかと、そんな馬鹿な考えさえ浮かんでしまう。

雨粒が入りこんだのか、それとも地下水が漏れているのか、足元は濡れ、ぴちゃぴちゃと音を立て始めた。歩を進めるたびに等間隔で鳴る音は、まるで催眠術。ぼんやりしてきたデイエガを、更に眠りに誘う。

首を振る。意識よ飛ぶなと、自分に言い聞かせる。目の前を歩く彼女の揺れる銀髪と、トンネルを反響する彼女の声が、振り子のようにスリープの魔法をかけてくる。霞む視界。次第に足がもつれ、壁へと寄りかかる。その拍子に、ベルトにきつく結わえていたはずの腰袋がなぜか外れ、地面に転がり落ちた。命の次に大切な、聖遺物の入った袋。すぐに取らなくてはと、手を伸ばすが、デイエガの身体は言うことを聞かない。

『瘴気漂わせた半妖が』

山小屋の老婆の声が、頭に響く。

そうだ、自分の中の魔の部分が、香に反応したのだと、改めて思

う。独特の香りが、身体中に入り込み、魔を追い出そうと暴れだしているのだ。

「やはり、俺は」

呟き、意識を失う。

『 わしには見える。若き剣士よ、お主の中に眠る魔が、この香で狂わされるのが』

視界に広がる暗がりの中で、老婆の言葉が増幅されていく。

しかし、魔女は気づかぬまま、ずんずんと奥へ……。

山小屋の老婆は魔除け香を袋に詰め、にたにたと口の端を震わせるように笑い、

「金に魅了された亡者と、恐ろしい魔物の巢食う穴に、瘴気漂わせ
た半妖が向かうのとは、正気の沙汰ではないのお」

と、剣士に囁くように言った。老女に小馬鹿にされ、ムツとしながらも、言われた剣士デイエガは無言で礼金を支払う。

「彼は、半妖などでは」クヒは我慢できず、口に出したが、

「いや、似たようなものだ」デイエガは彼女を制するように、勢いづくクヒの前を、腕で遮った。

「人間か、魔物か。容姿の問題ではない。その心の中に、魔が棲みついていれば、人として魔になる。自らの力に溺れ、揮えば、後戻り出来なくなるぞ、若いの」

朽ちかけた丸太作りの山小屋に、まじない道具と獣の干物、野草やハーブから調合した香の匂いが混ざり合う。加えてカーテンや装飾物で、狭く薄暗い空間。デイエガとクヒは、鼻からの刺激に眩暈を覚え、麻酔にかかったような非現実的な感覚に陥っていた。

ゆらゆらと、ランプの炎が揺らめき、老婆の言葉と共鳴する。

「この香は、魔物の感覚を麻痺させ、狂わせる。獣はそれを嫌い、近付かぬ。 わしには見える。若き剣士よ、お主の中に眠る魔が、

この香で狂わされるのが。押さえ込まれてはいるが、強い魔じゃ。

香に魅了されることなく、無事、王都に着くことが出来るかどうか。心を強く持たねば、二人とも、穴の奥深くで果てるであろう」

おどろおどろしい老婆の言葉が、脳内を旋回する。

ディエガは振り払おうと、何度も頭を振った。ねっとり絡みついた蜘蛛の巣を払うように、身体を揺らす。やがて意識が遠のき、山小屋でのそれが記憶の中から浮き出てきたに過ぎないことを悟ると、今度は懐かしい、村での光景がディエガの脳裏に広がり始めた。

「インフィニティの継承者が、魔に侵されたと知って、放置しておくほど、この世は甘くないのだよ」

小さなディエガの前で、しわがれた黒い魔女がにたりと頬を歪める。

村にひとつだけの、大きなレンガ屋敷。その一室に、魔女の部屋がある。様々な薬品の臭い、ぷくぷくと妙な音を奏でる不気味な液体。奥に鎮座する小柄な年老いた魔女は、黒いローブの下でディエガを嘲笑った。

椅子に縛られ、身動きすら出来ない自分に向けられる、数多の視線。広い部屋の中央で、晒し首にされているような感覚。顔面から火が出そうな恥じらいを吹き飛ばそうとしてなのか、彼は獣のような鋭い目で魔女を睨みつける。

「何、苦しいことなどない。あつという間よ。眠るように、死ねるのだから」

魔女の手の中で、銀色の筒がくるくると踊った。聖遺物インフィニティと名づけられたそれを、ゆっくりと愛でながら、部屋の両端に並んだ男たちに合図を送る。

表情のない男たち数人が、彼を囲んだ。うち、一人の手に、銀の杯。なみなみと注がれた、赤い液体が、ディエガの口元に寄せられる。必死に首を振り、拒否するが、彼らの恐ろしい力で、固定されてしまう。

「お主が死ねば、次の継承者が自^{おの}ずと現れる。何十年、何百年先になるのかわからんが……、黒い瘴気を漂わせる狼のような男に、世界を託すほど、無謀ではないだろう。さあ、飲むがいい。そして、この世界から、消え去るのじゃ」

デイエガの唇の隙間に、液体が入り込む。熱く、苦い。血のような味がする。

「ファイ様、やめて、やめてください！　お願いです、彼を、殺さないで！」

視界の外側で、必死に叫ぶ少女の声。魔女の部屋に単身乗り込み、取り押さえられていた。クヒだ。長い銀髪を左右に揺らし、青い瞳から、大粒の涙を流し、声の限り叫ぶ。

「彼が何をしたというのです、誰を傷付けたというのです？　私は知っています、その心が、美しく、気高いこと、誰よりも、人の痛みを知っていること。それでも、彼は死ななければならぬのですか！」

ほほうと、また、魔女は笑う。

「では、クヒ。そなたは、この男を救えるのか。継承者の意思でしか動かない聖遺物、インフィニティを使わねば、魔を浄化できないのじゃぞ？　極限状態で尚、インフィニティに自らの運命を託す、など、この男に出来ると思うのか。それとも、他に道を探すか？　北のかの地まで、呪いをかけた張本人を探しに行くのか？」

「それは……」

「即答できまい。この婆の魔術をもつてしても、解けない呪いじゃぞ。魔法を習い始めたばかりの小娘に、何が出来る。　さあ、杯を」

魔女は指差した。銀の器が、口に突き刺さるように押し付けられ、固く結んでいたはずのデイエガの唇が緩んだ。液体が流れ込む、唇、舌、喉を通り、食道へ。もがこうとすればするほど、反射的に飲み込んでしまう。

空になった杯とともに、デイエガは椅子に縛られたまま、床に倒

れた。赤い液体が、彼の口から吐き出され、疎らに足元を染める。身体が熱を持ち始めた。ジユウジユウと全身から煙が噴出、溶けていく、身体の内側から、どんどん溶けていく。

転げた姿勢で首を持ち上げ、ようやく視界に入ったクヒに、涙目で訴えた。苦しい、助けて、とでも、言いたかったのか。自分の姿を哀れんだのか。口を必死に動かしたが、言葉は出なかった。「あ」でもない、「う」でもない。聞き取れないほどの微かな声の欠片が、零れるか零れないかくらいの小さな吐息。それが、精一杯だった。頭を抱えたクヒの悲鳴が、室内に響く。甲高い彼女の声は、デイエガの脳を激しく刺激した。胸がぎゅつと縮んでいく。動悸が早くなる。身体がぶるぶると震え、思うように身体が動かせない。

「すぐには死なぬのか。抵抗しているのか」非情なファイの言葉。「介錯を」

控えていた、鎧をまとった大男、デイエガのそばに歩み寄り、大剣を振り上げる。

「毒でも死なないとなると、あとは首を落とすしかないからのお」笑いを含み、細く切れた鋭い目で、ファイはしっかりと振り上げられた大剣を見据えた。

鋭い剣先が、大きく目を見開いたデイエガの視界の中央に差し掛かった、そのとき、

「ファイア！」

少女の声とともに、小さな炎の矢が鎧の男を直撃した。大男は体勢を崩し、大剣とともによろめきながら後ろへ倒れこむ。魔女を取り囲んでいた人垣に剣先が向かい、慌てて逃げ惑う能面の男たち。棚や机、瓶や壺をなぎ倒し、零れた液体に足を取られ、ガラスや焼き物の破片があちらこちらに飛散する。

「お前たち、何をしている！」

魔女の怒声。同時に大きく振り上げたその右手の指先。集められた魔法の力が、部屋の向こう側、少女の元へと一直線に向かう。

彼女はとっさに、シールドの呪文で攻撃を防いだ。未熟で不完全

な穴だらけの盾から魔法が漏れ、柔らかい肌を何度も傷付ける。足りない魔法力を補うように両腕でしっかりと顔面をガードし、腰を低く構えるクヒ。魔法の攻撃魔法の緩んだ隙に、周りの男たちの足を縫うように身を屈めて走り出す。

年老いた魔女は目を見開いた。衰えた身体が、ぶるぶると身体の奥底から波打った。うら若い銀髪の乙女が老婆の眼前に迫り、手に持った聖遺物の筒を奪い取っても、老体は硬直したまま動かない。

「何をする気じゃ」

両手を肩まで挙げたまま固まった魔女は、怒りに満ちた表情で睨み返すクヒに恐る恐る尋ねた。

「……幾らファイ様でも、やっていいことと、悪いことがあると思っわ。彼を殺して、それで全てが終息するだけでも？ 北の帝国は今も勢力の拡大を続けているのよ。十年、百年、現れる確証もない次の勇者を待ただなんて、そんなこと……、現実に来ない」

大粒の涙がクヒの頬を伝うのが、床に伏したデイエガの視界に入った。か細い足が、びくびくと震え、振動が床を伝った。

「わ、わしに抵抗するということが、どれほど愚かしいことか、あなたは知らなさ過ぎる。正義感を貫くだけが生き方ではない。時には非情な決断も要る。ほら、わからぬか。死に損ないの魔力が、どんどん膨れ上がっているではないか……！」

ファイの言葉が終わるか終わらぬかのとき、床から大きく噴出す黒い気配を、クヒは感じ取り、慌てて振り向いた。直後、息を呑むデイエガの身体から黒い瘴気が溢れ出していた。死んだようにぐったりとした彼の意識は、完全に闇に飲み込まれ、感じたことがないほどの暗く、重く、冷たい気配に支配されてしまっていた。彼白い肌がいつの間にか、どす黒く沈んだ色に変わり、ごつごつとした鱗のようなものに覆われてゆく。指先から、頬から、次第に変化し、力を余した異形は、括り付けられていた椅子を砕き、ゆつくりと立ち上がった。

「手遅れじゃ……！」ファイと手下の男たちは恐れおののき、後退

りした。

ディエガの面影はなかった。真っ黒な悪魔が、気を失った目でこちらを見ている。部屋の中央、黒い悪魔と、クヒ、二人だけの空間。蛇に睨まれた蛙のように、身動きすら出来ない。

どうしたらいいのか、考えあぐねていた彼女の手の中で、聖遺物インフイニティが僅かに振動を始めた。クヒは恐る恐る、右手に握っていた筒を眼前まで持ち上げる。振動とともに、光を帯びている。白く清らかな光が筒全体を覆い、まるで何かを訴えかけているかのよう、更に大きく振動する。

「遺物が、聖遺物が反応している……。ディエガの心はまだ、残っているのね」

ファイの先ほどの言葉を思い出す。

「継承者の意思でしか動かない聖遺物、インフイニティを使わねば、魔を浄化できないのじゃぞ？」

『極限状態で尚、インフイニティに自らの運命を託す、など、この男に出来ると思うのか』

クヒは意を決したように、筒を両手で握り締め、ぎゅちりと目を瞑った。光の振動は徐々に形を変え、鋭いく長い両手剣へと変化する。輝く切っ先に想いを乗せ、唇をぎゅつと結んで、目を開ける。ゆらりゆらりと、噴き出す魔力に耐えられず、足元の覚束ない生まれたての悪魔の喉元へ、彼女はそつと、剣先を向た。

「インフイニティは魔を裂く物。あなたを救いたいと思うこの心が真実なら、きつと魔は断ち切れるはず」

「お願い、目を覚まして！！」

喉仏に当たる冷たい感触で、目が覚める。聖遺物インフイニティが作り出した小さなナイフの刃先が、ディエガを狙っていた。

視界に流れるような銀髪。魔法の作り出した淡い光に照らされ、キラキラと眩しく反射する。

「ちゃんと、前を見て。状況を把握するのよ。また、あんな場面で意識を失って。あの老婆の言葉どおり、王都にたどり着く前に果てるつもり？」

唐突に浴びせられた台詞に、デイエガは一瞬、目を白黒させた。が、黒い何かが素早く、ひゅっと目の前を掠めて飛び去ったことで、現実に戻される。

洞穴だ。湿気と香の混じり合った空気、キーキーと獣の鳴き声がかたましている。香の煙の奥で、微かに光る無数の目。吸血コウモリ、ワーウルフ、ゴブリン……数え切れない。事態を把握し、慌てて体勢を立て直す。持ち上げた頭が不意に、壁を支える柱にぶつかったことで、ここがただの洞穴ではなく、王都へと続く坑道跡地であることを改めて思い知る。

背中の剣を慌てて抜き、構えた。

魔よけの香は、もはや全く用をなしていない。クヒの手から離れ、地面に転げ落ちていてはいないか。息を潜めていたはずの魔物が血気だったのは、意識を失っている間に自分の中から這い出た瘴気のせいだと確信した。そうでなければ、目の前の彼女が必死に、ミストの魔法で魔物を攪乱させておく必要がないはずだ。

「どれだけ、気を失っていたんだ」

突進してきた吸血コウモリに刃を下しながら、デイエガは問う。

「さあ、数十分……、かしら。私にとってはもっと長く感じられたけど」

ナイフに姿を変えたインフィニティを腰に差し、左の小脇に抱えていた杖に持ち替えると、クヒはサンダーの魔法をデイエガの長剣へ浴びせた。金色に輝く雷の魔法剣が、闇を裂く。

「すまない。こんなことなら、最初からこうしておけばよかったんだ」

次々となぎ倒される敵の奇声、びゅんびゅんと風を切り、唸る剣

の音で、その台詞は殆どクヒには届かなかった。剣の軌道の隙間を縫って、小さな炎の玉が飛ぶ。連続するファイア魔法、重なる死体。「え、何か言った？」

攻撃の合間に、クヒが叫んだ。

壁際で魔法を唱える彼女から少し離れて直接攻撃をしていたデイエガは、絶え間ない攻撃で魔物たちが怯んだ隙に、大声で答える。

「どの道、俺らは真つ当じゃない。何も普通の人間みたく、香に頼らず、俺たち自身のやり方でやってりゃ良かったんだよ」

「え、何？」

「き……聞こえないかなあ。つまりさ、俺たちはやつぱり、戦いなから突き進む方が性に合ってるってこと！」

そうね、と、クヒが笑ったのを、確認すると、デイエガは再び剣を構えた。

あの日突きつけられた刃先と、さっきのインフィニティのナイフが、彼の脳内でリンクしていた。安全な道を進むなんて選択肢は最初からなかったんじゃないかと、自分に言い聞かせる。互いを信じているからこそ、きつとどんな困難にも立ち向かって行ける。気絶していた間に立ち込めていた瘴気を振り払うように気合を入れ、彼は剣を振るった。

積み重なっていく死体を乗り越え、更に奥へと進んでいくと、次第に前方がほの明るくなってきた。王都ラージアへたどり着くまで、あと少し。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2099c/>

DIEGA

2010年10月9日14時30分発行